



2013年度 中央大学 ボランティアステーション報告書



発行日 2014年3月31日
発行者 中央大学ボランティアステーション



2013年度

中央大学 ボランティアステーション報告書

【巻頭】
学生たちの
ボランティア活動

【巻頭】 学生たちのボランティア活動



「ボランティア活動を通して得たもの」

法学部法律学科4年 白倉隆之介



「知識も経験もない私たち大学生に、一体何ができるのだろうか？」

2011年冬、初めて気仙沼市面瀬中仮設住宅を訪問した際に思ったことだ。法学部・中澤秀雄教授の講義での呼び掛けがきっかけで、自分も被災地の復興のために何か力になりたいと鼻息を荒くして臨んだが、初めての訪問では、被災者の方を目の前にどんな話をしてよいかも分からず、沈黙の時間が怖かった。自分の無力さを感じた。

だが、それでも私は訪問を続けた。「傾聴ボランティア」を単なる言葉遊びで終わらせないよう、手法の面でも気持ちの面でも誠心誠意向き合った。あなたは被災者、私は支援者、そんなくりは全て取り払い、一人の人間として。そうしたところ、徐々に私の顔と名前を覚えて下さる住民の方が増え、感謝の言葉を直接口にされることが多くなった。微力ではあるが、無力ではない。こう思えるようになったことが自分の自信にもつながり、活動を続けることができた。

ボランティア活動中、私は自治会長さんのお許しを得て仮設住宅内の集会所に寝泊りをさせて頂いていた。朝から晩まで仮設住宅の中をくまなく回り、様々な声を聞いた。確かにプライベートな問題もあったが、高齢者福祉、二重ローン、虐待・・・多くの問題が今この国の至るところで起きている社会的な課題であることに気づいた。そして、課題が地域から発生していく以上、解決策もまた「地域」に求めるべきではないかと考えるようになり、自らも当事者として関わりたい思いが強くなっていった。

3年の春、多くの学友と同様、自分が進むべき道について考えた。社会貢献性が高く、社会の課題に対して直接的に向き合っていける仕事は何か、私は行政官の道を選んだ。もちろん組織の中で仕事をしていく上では、自分の思い通りにならないこともあると思うが、それでもボランティア活動をしていたころのひたむきな自分を忘れずに精進していきたい。

「全ての政策は現場から生まれる。」中澤教授がよくおっしゃる言葉である。大教室で言われてもピンとこなかったこの言葉が、ボランティアの現場ではひしひしと感じられた。そんな「実感」を得られたことが、実は一番の財産なのかもしれない。

【巻頭】 学生たちのボランティア活動



「なんとなく」を変えたボランティア

文学部人文社会学科哲学専攻 3年 宮崎汐里

・震災直後、動き出せなかった自分
震災後の混乱のなか、高校生活最後の演奏会を終え、5日と経たないうちに始まった大学生活。被災地で避難所生活を送る親戚をよそに、私は「大学で何をしたいか」も見えず、自分は何も動いていないという罪悪感を抱えながら、なんとなく日々を過ごしていた。



・支援の始まり

私が初めて被災したまちを見たのは、その年の夏だった。仮設住宅への入居が決まった親戚のところへ向かうと、きれいな海、あたたかい人の繋がりのある大好きなまちがなくなっていた。それから3か月後の2011年11月、初めてボランティアという形で現地に入った。悶々としていたなかでやっと踏み出せた一歩であった。これが私の支援の始まりである。

・“ボランティアの大先輩”の言葉

現在、私は仮設住宅での活動と子どもたちへの学習指導を行なっている。どちらも、「もっと人と関わる活動がしたい」と思ったのがきっかけだ。なんでもいいから被災地の役に立ちたいと始めた活動であったが、活動から約2年半が経つ現在に至るまでの間に、それは大きく変化してきたと感じる。変化のきっかけは、現地で活動するNPOのスタッフの言葉だ。

「あなたたちは、これからの社会を担う存在。仮設住宅や被災地、そこで営まれる人々の暮らしのなかには、法律、経済、社会の様々な課題が転がっている。」

・社会への関心

それから、「なんとなく」であった私の大学生活は大きく変わっていった。学校での授業の選択や手に取る本は、活動を円滑にする手法に始まり、地域社会や市民の活動、政治、教育など、いままで強い関心のなかった分野に広がった。被災地の課題は自分の生きる社会を見直すことに繋がり、現地の人々との出会いと関わりはその課題に向き合って考える決意に繋がっている。

また、自分達の理念はどこにありどのように伝え実行していくか、を常に考える活動は、社会への関心とともにコミュニケーション能力や課題解決能力など、様々な力を養ってくれた。現在私は市民活動に関心がある。社会の一員である自分が、やりたいこと、出来ること、すべきことは何かを問いつづけながら生きていきたいと強く思う。

【巻頭】 学生たちのボランティア活動



ボランティア活動を 通して得られたもの

～自分の価値を考える機会としてのボランティア～

法学部法律学科 3年 西 宏明

ーボランティアを始めたきっかけ

一浪をしたにもかかわらず、大学受験を成功させることはできませんでした。自分は何のためにここにいるんだろう。大学生活のスタートはそんな暗い感情からスタートしました。

その中で転機となったのは、サークルでたまたま行った、石巻でのボランティアツアーでした。1年生の6月、震災から3ヶ月が経ってもなお異臭の漂う町でのボランティアでした。そ



こで出会ったおばあちゃんに言われた一言が、「あんた達は帰る家があるでしょう。私達は、風が吹けば揺れる家に住んでいるんだ。」長期的視点を持ったボランティアが少ない中、ここで長期視点を持った復興支援団体を作る必要性を感じ、ツアーの帰りには友人に電話して、団体結成を決めました。

ーボランティアで感じた自分の無力さ

1年生の12月から、活動拠点を福島県相馬市に移してから、自殺・孤独死を防ぐことを目的としてコミュニティ形成のためのイベントの企画・運営に携わりました。しかし、思うように目的達成とは行かず、現地のニーズも計りきれないまま活動を続けていたように思います。無力だ…学生には経験もカネもない。スキルも人脈も…ない。そんな中で、僕らにあるもの…学生という身分と有り余る時間だと気付きました。それをフル活用し、仮設住宅に住んでいる方全員の声を聞いて、イベントに生かせないかと考えて、福島大学の大学生とも協力し、3ヶ月かけて約1000戸の訪問を完了しました。無力だからこそ、泥臭く前に進む。自分の中で1つ大きな成功体験が得られました。

ーボランティアで学んだことをビジネスの世界へ

2年生の終わりから、八王子のとある中小企業で学生社員をさせていただくチャンスをいただきました。そこで学んだのは、ビジネスの世界では、同じ時間を使って他の人よりも大きな価値を出すところ（相対評価）、その人がいる意味になるのであって、それは決して絶対評価ではないのだ、ということでした。自分の得意分野を徹底的に生かすという覚悟でビジネスの世界に飛び込まなければならぬ。そこで、自分の得意分野として自信を持って言えたのは、泥臭く現場から情報収集する力とその情報を使った問題解決能力でした。この力を生かし、一流のビジネスマンを目指します。

【巻頭】 学生たちのボランティア活動



Contents

【巻頭】学生たちのボランティア活動

「ボランティア活動を通して得たもの」

法学部法律学科4年 白倉隆之介.....3

「なんとなく」を変えたボランティア

文学部人文社会学科哲学専攻 3年 宮崎汐里.....5

ボランティア活動を通して得られたもの

～自分の価値を考える機会としてのボランティア～

法学部法律学科 3年 西 宏明..... 7

【刊行によせて】

学生部長 平山 令二..... 12

学生部ボランティア担当委員 中澤 秀雄..... 13

コーディネーター 松本 真理子..... 14

【活動編】

1. 東北ボランティア

1. 新入生歓迎!被災地スタディーツアー@女川 16

2. 2013夏の東北ボランティア 18

3. 春季被災地支援ボランティア(女川スタディーツアー) 21

4. 復興支援インターン企画 22

5. 被災地支援学生団体ネットワークの活動 23

2. 学内ボランティア

1. 中央大学クリーン作戦2013 ～今日からはじめられる社会貢献活動～ 27

3. 地域連携

1. ひの市民活動フェア 30

2. 市民社会をつくるボランタリーフォーラムTOKYO2014
分科会22「震災学生ボランティア交流会2014」..... 31

4. 地域と学生のコーディネート

1. 地域から(八王子市・日野市) 32

2. 学生から 33

【報告編】

5. 学内での活動報告事業	
1. ボランティア活動写真展	36
2. 父母懇談会「キャンパスライフ体験談」	38

【学び編】

6. 防災講座	
1. 災害救援ボランティア講座	40
2. 防災特別講座	41
7. シンポジウム	
1. 震災シンポジウム「学生に知ってほしい、本当のボランティア」	43
8. スキルアップセミナー	
1. ボランティアマナー講座	45
2. ボランティア学生団体 代替わりのためのワークショップ	46
3. 心の勉強会「震災に遭った子どものこころ」	47

【資料編】

9. ボランティアステーション 利用集計	50
10. 震災への対応 (ボランティア活動) 2011.3.11～	51
11. 協力・連携	57
12. メディア掲載	
1. 新聞記事	59
2. テレビ放送	60
3. 大学広報誌	61
13. 制作物掲載	
1. パンフレット	72
2. ポスター	73

刊行によせて

学生部長 平山 令二



この度、初のボランティアステーション活動報告書を刊行する運びとなり、学生部長として、大きなよろこびを覚えています。ボランティアステーションの開設は中央大学の長い歴史に刻まれるに値する大切な1ページと考えるからです。

中央大学が大学全体としてボランティア活動に取り組む姿勢を確立したのは、やはりあの2011年3月11日の東日本大震災でした。あの日、ここ東京でも大きく大地が揺れ、私たちも巨大な自然災害を体験し、その後、三陸地方を中心に大津波が襲い、犠牲者が2万人近くに及んだことも知らされたのでした。

甚大な被害の実態が明らかになるにつれ、学生たちが立ち上がりました。困難な状況のなか多くの学生が被災地に駆けつけ、出来ることのすべてに取り組みました。同様に、教職員、学员（中央大学の卒業生）も様々な支援活動を始めました。そのような多様な活動のなかで、学生、教職員、学员などのネットワークが構築され、大学全体として支援活動を行うという方針が確立されました。

そして、一過性ではなく、継続した被災地支援活動を行うためにも、中心的な組織が必要であるという機運が盛り上がり、またボランティア活動の専門家も必要である、ということも合意されました。こうして、2013年4月、被災地での豊かな活動経験を持つボランティアコーディネーターが着任し、ボランティアステーションが学生部に開設されることになりました。ボランティアコーディネーターは着任早々、学生ボランティア団体などと協力し、多方面にわたる活動に取り組みました。現地での支援活動、大学での報告会、ボランティア講習会などです。このような活動を通して大学内にボランティア文化が確実に醸成されてきました。

しかしながら、ボランティアコーディネーターはまだ1名であり、ボランティアステーションとしての独立した事務組織もありません。被災地支援という活動を強化し、また地域貢献などの活動に新たに取り組むためにも、複数のボランティアコーディネーターは必須であり、事務職員の配置も必要です。そのような整備を行うことによって、3年前、被災地の人々を少しでも助けたいと思った中央大学関係者の初心も実現されると考えます。

最後になりますが、学生の各種のボランティア活動を寄付などで支援してくださった様々な方々、学员の方々に心より感謝申し上げます。また、未熟なところも多々ある学生たちを暖かく迎えてくださり、種々の配慮をしていただいた被災地の方々に対しても、心より感謝申し上げます。

■ 平山 令二 (法学部教授 専門分野/ドイツ語・ドイツ文学)
1951年新潟市生まれ。東京大学人文科学研究科博士課程(ドイツ文学専攻)中退。山形大学講師などを経て、1984年より中央大学法学部勤務(ドイツ語担当)。専攻はドイツ語・ドイツ文化。現在の研究テーマは、レッシングやゲーテなどの18世紀ドイツ文学・思想。ドイツのユダヤ人文化。ホロコーストからユダヤ人を救った人々も研究している。2013年4月1日より学生部長に就任。

学生部ボランティア担当委員

中澤 秀雄



中央大学ボランティアステーションは2013年4月に設置され、一年間のうちに急速に活動の幅を広げながら歩みを刻んで参りましたが、東日本大震災の記憶の風化が進行する中、その多彩で地道な活動実績が必ずしも学内に浸透しているとは言えない状況にあります。本報告書が、ボランティアステーションの活動やそれを支える理念、学生およびスタッフの奮闘ぶりを理解する一助になれば、幸いに存じます。

中央大学には福祉関係の学科が存在しないことも一因となり、阪神大震災以降の「ボランティア元年」と言われる状況において他大学がボランティアセンターを立ち上げる中、取り組みが後手に回っておりました。毎年開かれる「東京六大学ボランティアセンター連絡協議会」には唯一、「学生課」という肩書きで担当者が出席し、肩身の狭い思いをしていたのが実情であります。しかし3.11発災直後から、学生のあいだに「何かしたい、しなければならない」という声が多くあがり、委員会においても、南甲倶楽部の浅野弘毅氏をはじめ積極的に連携をはかって下さる動きが出たことは、中央大学の学生助育にとって一つの転機となりました。2012年度からは「被災地支援学生団体ネットワーク」を立ち上げ、特定の地域と顔の見える関係を築いた学生団体が、長期休みのたびに継続的に現地に通う体制となりました。この間、学会の皆様から頂いた募金や多大な支援、学生を暖かく迎え入れて下さった被災地の方々、学内で応援して下さいる教職員の皆様、学生を指導して下さいるNPOや自治会の方々などに支えられ、ボランティア文化を細々と醸成して行くことができました。こうした蓄積の上に、2012年度から3年間の期限付きではありますが「教育力向上推進事業」の予算を得て、経験豊富なボランティア・コーディネイターとして松本真理子氏をお迎えし、本「ステーション」を急加速させることが出来ました(2014年4月からは「ボランティアセンター」と改称予定)。しかし、組織の持続可能性に関しても、若い世代の担い手の獲得についても、何より学内の認知・理解獲得に関しても、まだまだ危ぶまれているのが現状であります。

改めて、東日本大震災後2年間における学生部ボランティア活動および「ステーション」となっている1年間の活動は、広報が下手で派手さはないものの、その内容および継続性からみて、先行していた他大学と比較しても、ひけをとらないものとなっております。他大学の学生からも「中央大学が羨ましい」という声を頂戴しております。この間、時間と空間を切り拓く勇敢な学生たちの活動を支援して下さいる全ての皆様に心より感謝申し上げ、また献身的な仕事を続けてきたステーションスタッフの尽力を銘記しつつ、この芽を育てていくための、引き続きのご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

■ 中澤 秀雄

(法学部教授 専門分野/政治社会学・地域社会学)

東京都出身。1994年東京大学卒。2001年東京大学から博士(社会学)の学位を取得。札幌学院大学社会情報学部講師、千葉大学文学部准教授を経て2009年から現職。日本社会学会、地域社会学会等に所属。主著は新潟県原発問題を扱った『住民投票運動とローカルレジーム』(ハーベスト社)や廃棄物・原子力・環境文化等のテーマを幅広く扱った『環境の社会学』(共著、有斐閣)など。前者により第5回日本社会学会奨励賞、第32回東京市政調査会藤田賞などを受賞。2012年4月1日より学生部ボランティア担当委員に就任。



コーディネーター 松本真理子

この一年、ボランティアステーションと共に走ってくれた学生たちに感謝するとともに、学生たちのひたむきな姿を温かく見守ってくださった関係者の皆様に御礼申し上げます。

ボランティアステーションが2013年4月に新設されるきっかけは、東日本大震災のボランティアを学生たちが始めたからだと聞いています。あれから3年経ち世間の風化は進んでいますが、中大生たちは「被災地を支えたい」「復興の役に立ちたい」という熱意を持ち続け、先輩から後輩へバトンを渡し、現在も活動を続けています。

中大生のボランティア活動は、被災地支援以外にも広がりました。5月に初めて開催したゴミ拾い活動「クリーン作戦」は、「もっと取り組みたい」と学生の声が集まり、昼休みの30分間を使って定期的に行うスタイルへと展開しました。9月から5回連続で防災について学ぶ「防災特別講座」は、他大学の災害レスキューチームとのつながりが生まれ、学生たちの自主的な学習会へ発展しています。「被災地スタディツアー」や「復興支援インターン事業」は、プログラムに参加した学生が白門祭で、現地の食材を使った料理を提供して東北をPRしました。日野市のイベントで演奏した楽器演奏サークルは、「演奏が良かった」という噂が広がり、他施設からも声がかかるようになりました。学生が自ら一歩踏み出したことをきっかけとして、キャンパス近隣地域や他大学との新しいつながりが少しずつ生まれました。

こうした学生たちの活躍は、学生を受け入れてくれたボランティア先の人々やコーディネーターなど、学内外のたくさんの方の関わりに支えられています。初めてボランティアをしてみようという学生の多くは「何かしたい」という漠然とした思いで飛び込みます。それは時に常識やマナーが伴っていません。それでも、そうした学生たちを多忙な現場に受け入れ、及ばないことがあれば伝え、良いところを認めてくれました。

「ボランティアをしに行ったのに、いただいたものの方が多かった」。多くの学生が感じることで、す。「いただいたもの」とは、「ありがとう」と認められたこと、「こうした方がよい」と自分と向き合ってくれたこと、それまで思いもよらなかった「生き方」や「価値観」に気付かせてくれたことなどです。自分と相手との丁寧な関わりを「いただいた」ことで、学生はさらに次の一歩を踏み出すことができ、中央大学のボランティア活動を広げてくれました。

この報告書には、一人一人の学生に対してなされてきた、周囲からの数多くのコミュニケーションは表現できていません。巻末に掲載した関係者のみなさまも、ほんの一握りです。読者の皆様には、行間にある、周囲の大人たちの学生に対する関わり方の積み重ねが、活動を継続発展させていったということを、想像力で補いながら読んでいただくことをお願い申し上げます。

■松本真理子 (中央大学ボランティアステーションコーディネーター)
千葉県出身。2004年明治大学卒。在学時に教育系NPO団体の立ち上げに参加。卒業後はコミュニティ紙の記者、地産地消イベントプロデューサーなどを経て、2011年9月より宮城県女川町で子どもたちの放課後の居場所「コラボ・スクール 女川向学館」(運営:認定NPO法人NPOカタリバ)にて広報と地域コーディネーターとして従事し、復興支援に携わる。2013年4月1日より中央大学ボランティアステーションコーディネーターに就任。

活動編

1. 東北ボランティア

1. 新入生歓迎!被災地スタディーツアー@女川 _____

ボランティアステーション開設後、初めての試みとして学生（新入生）が東日本大震災で被災した地域を実際に訪れ、見学することで、現在の被災地の様子・状況を知り、これから復興支援ボランティア活動を始めにあたり、自分自身に何ができるのかを学び、考える契機とする「被災地スタディーツアー@女川」を実施した。また、ボランティアに関心を持つ新入生どうしのコミュニティ形成を促進・補助するきっかけとした。

- 日 程 : 2013年5月24日(金)～26日(日) 2泊3日(1日車中泊)
場 所 : 宮城県牡鹿郡女川町
参 加 費 : 宿泊費 5,000円+食費等
参 加 者 : 1年生25名 被災地支援ボランティア学生団体の3年生1名、4年生1名
引率職員2名
- スケジュール : 1日目 多摩キャンパス発(車中泊)
2日目 石巻到着(門脇小学校見学)
女川町着(町立病院見学=桜守の会と植樹=町立病院・女川さいがいFM=巨大冷凍冷蔵庫マスカ-見学=13:00きぼうのかね商店街=
15:30女川向学館=宿泊「EL FARO(エル・ファロ)」
3日目 蒲鉾工場高政見学
女川発→多摩キャンパス到着・解散
- 勉 強 会 : 事 前 5月16日(木) 16:40～18:00 学生部委員会室
5月23日(木) 16:40～18:00 学生部委員会室
事 後 5月30日(木) 16:40～18:00 7103教室

<参加学生の声>

- ・ 以前は現地を訪れることを躊躇していましたが、今回参加し、町の方から「現地を訪れてくれるだけでいい」「女川のことについて帰ったら伝えてほしい」という声をき、このことに応えることが自分にもできると発見できました。
- ・ 受け入れてくださった方の心の広さや温かさを、身をもって感じました。震災について話して下さって、本当に有り難かったです。
- ・ 実際に見たこと、聞いた教訓を周りの友人や家族に話したいです。
- ・ 「復興を見届けて欲しい」という言葉が心に残っています。また、女川を訪れたいです。



事前勉強会の様子



津波で横倒しになった建物



植樹活動の様子



集合写真



海外の支援で建てられた冷凍冷蔵庫「マスカー」の見学



仮設商店街「きぼうのかね商店街」



女川向学館にて震災時のお話



高政にて震災時のお話

2. 2013夏の東北ボランティア

学生が長期休業期間を利用し、実際に東日本大震災で被災した地域を訪れ、現在の被災地の様子を知り、入門的なボランティア活動をすることで、被災地域のために自分自身に何ができるのかを学び、考える機会とする「夏の東北ボランティア」を実施した。

- (1) 被災地スタディーツアー@宮城県女川町
日 程： 2013年8月9日～11日
活動先： 女川桜守りの会
内 容： 里山の整備活動
参加者： 男子学生6名、引率職員2名

- (2) 学校支援@宮城県女川町
日 程： 2013年8月19日～23日
活動先： 女川中学校、NPOカタリバ女川向学館
内 容： 中学生への学習支援活動
参加者： 女子学生6名、引率教職員2名

- (3) 吉里吉里国@岩手県大槌町
日 程： 2013年9月10日～12日
活動先： NPO法人吉里吉里国
内 容： 林業支援
参加者： 男子学生5名、引率職員1名

- (4) 気仙沼インターン(大学間連携ネットワーク 復興大学主催)
日 程： 第1クール 2013年8月26日～31日
 第2クール 2013年9月2日～7日
活動先： フジミツ岩商、阿部長商店
内 容： 水産加工会社への企業インターン
参加者： 各クール4名(男子学生2名、女子学生2名ずつ) 引率教職員4名

- (5) 仙台七夕まつりボランティア(仙台市商工会主催)
日 程： 2013年8月5日
活動先： 仙台商工会議所
内 容： 会場設営
参加者： 学生10名(男子学生6名、女子学生4名)

勉強会： 事 前 8月3日(土) 10:30～12:00 6408教室
 事 後 気仙沼インターン：
 9月26日(木) 16:40～18:00 ボランティアステーションルーム
 スタディーツアー、女川学習支援、吉里吉里国：
 9月27日(金) 12:40～15:00 6405教室

＜参加学生の声＞

- ・ 現地では山林の整備活動や震災時の避難所や仮設住宅の見学、現地の方との対話を通じて、メディアを通しては伝わらない復興へ向けた現地の方の強い想いや努力を知ることができました。今後も自分にできる形で関わっていきたいです。

スタディーツアー@女川に参加 法・3年

- ・ 被災地を己の目で見つめる大切さを改めて実感すると共に、勉学を教える難しさだけでなく子供たちと触れ合うことの難しさを痛感しました。恐ろしい震災を体験した子供たちとどのように接するべきかと悩み迎えた当日でしたが、待っていたのは勉学だけでなく部活動や行事準備など様々な事に懸命である子供たちの活発な姿でした。今後は見聞きした情報を周りへと伝えていくと同時に、魅力あふれる女川町への更なる支援を視野に活動を模索していきたいと考えています。

学習支援@女川に参加 法・1年

■スタディーツアー@女川



里山整備活動の様子



震災時のお話

■学校支援@女川



学習支援活動の様子



学習支援活動の様子

1. 東北ボランティア



学習支援活動の様子

■吉里吉里国@大槌町



林業支援の様子



林業支援の様子

■気仙沼インターン



水産加工会社での職業体験の様子



水産加工会社での職業体験の様子

3. 春季被災地支援ボランティア (女川スタディーツアー) _____

学生が長期休業期間を利用し、実際に東日本大震災で被災した地域を訪れ、現在の被災地の様子を知り、入門的なボランティア活動をすることで、被災地のために自分自身に何ができるのかを学び、考える機会とする。また、来年度の新入生対象のスタディーツアー実施に向けて、ステーションと一緒に企画、運営する学生を見つける目的で実施した。

日 程： 2014年3月20日～25日
 宿 泊： 21日…南三陸志津川自然の家 22、23日…女川町「エルファロ」
 参加者： 男子学生4名、女子学生4名 引率職員3名
 参加費： 現地宿泊費、活動中の食費
 行 程： 20日 夜 新宿駅集合、南三陸自然の家まで貸し切りバスを運行
 21日 南三陸で事前勉強会を実施（学生団体との合同勉強会）
 22日～24日 現地（女川）入りし、終日ボランティア活動。
 24日 夜 現地発
 25日 朝 新宿駅到着

〈備 考〉

- ・ 新宿ー東北間の貸し切りバス代、南三陸自然の家での宿泊料、自然の家から現地入りまでのマイクロバス代は、日本財団ボランティアセンターにより負担いただく。
- ・ 学生団体「面瀬学習支援（5名）」「チーム次元（3名）」「はまぎくのつぼみ（6名）」もボランティアバスに同乗し、南三陸自然の家にて合同勉強会を実施。勉強会実施後、各活動場所での活動となる。

4. 復興支援インターン企画

気仙沼インターン(大学間連携ネットワーク 復興大学主催、宮城復興局共催)

日 程： 2014年2月24日～3月1日

活動先： 八葉水産

内 容： 水産加工会社への企業インターン

参加者： 6名(男子学生3名、女子学生3名) 引率教職員3名

スケジュール：

1日目	午前	東北学院大学でオリエンテーション
	午後	現地に入り、語り部の案内による市(町)内の視察
2～5日目	終日	受入企業での職業体験
6日目	午前	現地を出発
	午後	東北学院大学に到着後、参加学生間で意見交換



八葉水産でのミーティング



他大生とのミーティング



包装作業



選別作業

5. 被災地支援学生団体ネットワークの活動

中央大学「被災地支援学生団体ネットワーク」について

設立趣旨

中央大学学生部では、2011年3月11日に発生した東日本大震災以降、継続的に被災地支援ボランティア活動を行う学生を支援し続けている。2012年4月からは、「被災地支援学生団体ネットワーク」を設立し、特定の狭い場所と継続的に関係を持つ多くの学生団体を支援する体勢へと移行してきた。

ネットワークの活動内容

- ・ 2012年度から、加入団体を対象に活動資金（とくに交通費）を助成する制度を設け、とりわけ休暇期間中の被災地支援活動を中央大学として継続する。制度の詳細は新年度以降、ネットワーク加盟団体とも相談しながら決定する。助成をうけた団体は、その成果を報告する義務がある。
- ・ 助成の決定如何にかかわらず、活動地までの交通や宿泊（ロジ）についての相談を随時受け付け、大学としてバックアップする。
- ・ 活動内容についても学生部ボランティア担当が随時相談に応じ、必要に応じて現地のキーパーソンとの橋渡しを行い、被災地のその時点での実情に応じた活動を、情報や社会関係資本の側面からもバックアップする。
- ・ 「ネットワーク」全体にまたがる活動として、東京でもできる活動（被災地の物品販売や宣伝、写真展など）を積極的におこなう。

《2013年度登録団体》

No.	団体名	活動地域	活動内容
1	はまぎくのつぼみ	岩手県宮古市	生活支援、学童クラブ
2	はまらいんや	宮城県気仙沼市面瀬	仮設住宅でのコミュニティ支援
3	面瀬学習支援	宮城県気仙沼市面瀬	面瀬小学校での学習支援
4	チーム次元	宮城県気仙沼市大島	漁業支援
5	和みの輪	福島県相馬市	イベント運営、コミュニティ支援

1. 東北ボランティア

《2013年度 学生団体活動実績》

※但し、届け出があった現地での活動、人数に限る。

団体名	日程	活動人数
はまぎくのつばみ	6月22日～23日	11人
	8月5日～8日	6人
	3月20日～25日	6人
はまらいんや	8月6日～11日	6人
	9月13日～18日	5人
	12月28日～1月4日	8人
	3月10日～14日	5人
面瀬学習支援	5月22日	2人
	6月15日～16日	2人
	8月3日～4日	3人
	8月18日～25日	12人
	12月21日～28日	13人
	3月20日～30日	12人
チーム次元	5月24日～27日	3人
	6月7日～6月10日	5人
	6月21日～24日	5人
	6月28日～7月1日	5人
	7月5日～7月8日	4人
	8月8日～12日	4人
	8月22日～26日	3人
	9月5日～9日	6人
	9月12日～16日	4人
	3月13日～17日	5人
	3月20日～25日	3人
	3月27日～31日	6人
和みの輪	6月22日～23日	1名

〈学生の声〉

気仙沼市面瀬中学校の仮設住宅において、集会所にいらっしゃった住民の方々のお話を聞いたり、子どもたちと一緒に遊んだりした。また、日本ホスピス在宅ケアの方によるボランティアコーディネート・指導の下、お宅を訪問させて頂く機会もあり、気仙沼の文化や魅力、発災時のこと、震災前・後の生活、今困っていること、悩んでいること等について多くの貴重なお話を聞くことができた。その中でも特に心に残っている出来事は、ある住民の方のお宅を訪問させて頂いた際に発災当時の様子をとても詳しくお話し頂いたことである。その方は普段の防災訓練に参加されていたため、強い地震が来た途端に「津波が来る!」と確信し、行政からの放送も聞こえたので直ぐに高台へ自車で避難したと話されていた。お話しの中で、何度も「災害はいつも違う、同じことはない」「行政の指示には素直に従うべきだ」と強くおっしゃっていて、その方の防災意識の高さに大変驚き、見習うべきだと思った。

活動の中で学んだことの一つは、コミュニケーションの難しさである。複数の住民の方と会話する際、誰にポイントを置くのか、承諾語を大事にする、憶測はだめ、細かいことに気づけるようになる、等々、住民の方のお話を聞く際や子どもたちと話す際に気をつけなければならないことがこんなにたくさんあるのかとはっとさせられた。

もう一つは、実際に見聞きしたことを行政の視点で分析するという挑戦の中で得ることができた。いろいろなお話を聞き、何件かのお宅を訪問して、震災で喪失したものは住民一人ひとりによって異なり、従って今必要としているものも異なるのだということに気づいた。そうだとすれば、行政や復興を支援する側が被災者の声を聴き、それぞれのニーズに対応することが不可欠であり、それを可能にする法制度をつくっておかなければ適確かつ迅速な非常時の対応や復興に繋がらないと思う。自分の目で直に見なければならぬことだらけだと思った。

「はまらいんや」 法学部 2年 女子学生

島民の方と話す機会があり、そこで「ボランティアでなく、仲間だ」と言われたことが、とても嬉しく思った。復興支援と聞くと、体を動かすような作業と思い浮かぶが、まず交流することで被災地の方々の心の癒しとなるような役割も大切であることが分かった。

「チーム次元」 総合政策学部 3年 女子学生

仮設住宅において、子どもたちとしおり作り、外遊びをした。印象に残っているのは、私がある一人の女の子に「友達も遊びに連れておいでよ」と言ったら「友達は引っ越しちゃった」と悲しげにつぶやいたことだ。ふとした時に、心の傷が垣間見え、ケアが必要であると感じた。

また、市役所職員の方に「職員は行政を担うので公平性を保たなければならないので、行政が活動できない分野をボランティアに活動して欲しい」ということをお聴きし、今後のボランティアの参考にしたいと思った。

「はまぎくのつぼみ」 法学部 1年 男子学生

1. 東北ボランティア

学生部における被災地ボランティア活動に関する補助基準

(趣旨)

第1条 この基準は、学生部委員会が認めた被災地ボランティア活動に必要な費用の一部を補助するための支出に関するものである。

(補助対象)

第2条 補助対象は、その活動計画が学生部委員会で承認されたものとする。

2 補助範囲（※補助する交通費の区間等）については、学生部委員会で決定する。

3 学生部以外からも補助を受けている場合には、その金額に応じて補助範囲を決定する。

(補助基準)

第3条 前条に定める補助費の基準は別表のとおりとする。

(補助の取消)

第4条 計画が中止された場合、または、計画に虚偽があった場合には、補助を取り消すものとする。

(報告書の提出)

第5条 計画実施後は、報告書及び証憑類を学生部長宛に提出するものとする。

(事務所管)

第6条 この基準に関する業務は、学生部事務室学生課が取り扱うものとする。

附 則（2012年4月17日学生部委員会）

(施行期日)

1. この基準は、2012年4月1日より施行する。

別 表	被災地ボランティア活動補助基準
-----	-----------------

〈学生が自主的に被災地で活動する場合〉

1. 国内復興支援活動交通費および宿泊費補助

※交通費は、通学区間を考慮し算出する。

交通費（起点は所属校地を原則とする）、 宿泊費	(1) 交通費、宿泊費について、 参加学生1人あたり20,000円の範囲内で実費の半額を補助
----------------------------	---

〈学生部が主催募集する場合〉

1. 国内復興支援活動交通費

交通費	(1) 交通費、宿泊費について 参加学生1人あたり20,000円の範囲内で実費の半額を補助 (2) 大学がチャーターしたバス、タクシー等交通手段の費用
-----	---

2. 学内ボランティア

1. 中央大学クリーン作戦2013 ～今日からはじめられる社会貢献活動～

「クリーン・キャンパス宣言」を掲げる大学として、大学構内のみならず、近隣地域のゴミ拾いによる美化活動（ボランティア活動）を行う企画「中央大学クリーン作戦」を実施した。参加のしやすい社会貢献活動を通じて、地域社会の一員であることを再認識するとともに、一般常識としてのゴミのポイ捨て防止の啓発につなげる。また、ボランティア活動を通して学生間の交流の契機とした。

(1) 第1回

日 時： 2013年5月18日（土）13:30～15:30
参加者： 学生・職員11名
ルート： 正門～野猿街道～壇場交差点

<参加者の声>

- ・ タバコの吸い殻が多く見られた。
- ・ また次回参加した時には、どのくらいゴミが集まるか見てみたい。
- ・ 地域の方と挨拶を交わしたり、お礼を言って下さったり、交流ができて良かった。

(2) 第2回

日 時： 2013年11月23日（土）10:00～12:00
参加者： 学生・教職・一般18名
ルート： 正門～野猿街道～壇場交差点

<参加者の声>

- ・ 道端にガムやタバコのゴミが多く捨てられていた。
- ・ ゴミを捨てる人の気持ちを考えるきっかけとなった。ポイ捨てをしてはいけないという意識を持ってもらいたい。
- ・ 自転車が通る時にお互いに声を掛け合い、安全に気をつけて活動できた。
- ・ ゴミ袋一杯になり、成果がみえたことが良かった。ゴミの重さをずっしりと感じた。
- ・ 参加人数を増やして、別ルートでも行いたい。

2. 学内ボランティア

(2) クリーン作戦ミニッツ

クリーン作戦に参加した学生から「もっとこの活動を広めたい、継続的にやりたい」という声があがり、学生が主体となって昼休みの30分間を活用した「クリーン作戦ミニッツ」が実施された。

クリーン作戦ミニッツ

日 程	参加学生	参加職員
2013年12月10日	5人	1人
2014年1月7日	6人	2人

<参加学生の声>

“今日からはじめられる、地域貢献活動”

身近な地域でもボランティア活動がしたいと考えていた私は、この謳い文句に惹かれる形で昨年5月に開催されたクリーン作戦に参加しました。

活動に参加する前は、地域の方々が定期的に清掃活動を行っているためにゴミはそれほど落ちていないだろうと予想をしていました。しかし実際にゴミ拾い運動に参加してみると、マンホールや排水溝付近、さらには畑の中にまでタバコや空き缶、ペットボトルなど予想をはるかに超える量のゴミが落ちており、最終的には参加者11名全員のごみ袋が満杯になるほどでした。

私は、地元の方々が利用している畑にまで多くのごみが捨てられている現状に悲しい気持ちになりました。11月にゴミ拾い活動を行った際には、近くに住まれている女性の方から中大生のタバコのマナーについての指摘を頂きました。大学周辺のゴミ捨ての現状を目の当たりにしたことで私は、もっと多くの中大生にポイ捨ての現状や地域の方々の苦情の声を知ってほしいと強く思うようになりました。

今後もクリーン作戦というゴミ拾い運動を通じて、より多くの中大生にゴミ捨ての現状を知って頂き、地域貢献運動の輪が広がって行くことを期待したいです。

文学部 人文社会学科 社会情報学専攻3年 松本 修

■第1回



活動の様子



地域の方から差し入れを頂きました

■第2回



活動の様子



集合写真

3. 地域連携

ボランティア活動を通して学生と地域が交流を深めていくことを目指し、地域のイベントやボランティア活動に参加しています。

1. ひの市民活動フェア

日野市の市民活動に関わる 54 団体が一同に会する、「ひの市民活動フェア」に「中央大学ボランティアステーション」として初めて参加しました。イベントの目的は、団体間の交流と市民活動に興味のある人へのPRです。そうした地域の集まりに本学も顔を出すことで、地域の方に存在を知っていただき、地域との結びつきを強めていきたいと思っています。

- 日 程： 2013年11月10日(日)、準備日11月9日(土)
場 所： 日野市市民ふれあいホール
参加者： 学生スタッフ2名、職員2名
内 容： ・ボランティア活動の写真展示(被災地ボランティアやクリーン作戦など)
・学生スタッフによる来客者への説明



<参加学生の声>

- ・ブースに来た地域の方は、みなさんとても熱心に話を聞いてくれました。普段はあまり接しない年齢の方も多く、活動の説明をどうやったら分かり易く伝えられるか、いつも以上に気がつかれました。
- ・来てくれた人の中にはOBも少なくなく、「がんばってるんだ」「私も東北ボランティアしたよ」など知らなかったことが分かり、勉強になりました。

2. 市民社会をつくるボランティアフォーラムTOKYO2014 _ _ 分科会22「震災学生ボランティア交流会2014」 _

市民社会に関心のある人、実際に取り組んでいる人たちで、身の回りの社会課題をみんなで共有し一緒に考えるためのイベント。主催は東京ボランティア・市民活動センター、今回で10回目となる。「生活・暮らし」「地域・居場所」「若者の市民力」「ボランティアリズム」の4つのカテゴリーで、2日半にわたって、全部で37の分科会が開催された。

- 日 時： 2014年2月8日(土) 13:30～18:00
 場 所： 飯田橋セントラルプラザ(JR飯田橋駅徒歩1分)
 参加者： 学生スタッフ2名、職員1名
 内 容： この分科会のサブタイトルは「東北愛DEAR!～気づく・築く学生力～」で、震災ボランティアに関わる関東圏内の大学生や高校生たちが集まり、知恵を出し合い、今後の活動に向けて新しい一歩を踏み出すきっかけにしようというもの。企画運営は首都圏の大学(早稲田・上智・法政・成蹊・東洋・青学・中央)の学生有志団体「学生ネットワークSTOCK」。
- プログラムは、震災ボランティアに関わる学生4～5人でグループをつくり「自分・東北・東京」について課題や不安を出しあい、それらを解決するアイデア企画を作るというもの。17つの団体より50人ほど参加があった。



<参加学生の声>

- ・様々な大学と大学生が、いろいろな地域で震災ボランティアをしていることが分かった。普段は出会えないので、とても刺激になった。
- ・初めて会う学生ばかりだったが、東北で活動続ける課題はどこも共通していることが分かった。「お金」「後輩への引き継ぎ」「周囲との意識の差」など、今後もこの出会いを大切に活動継続していきたい。

4. 地域と学生のコーディネート

ボランティアステーションではコーディネーターが、ボランティアをしたい学生、学生ボランティアを求めている地域の団体などのコーディネートを行っています。特に、地域の情報は、八王子市社会福祉協議会の八王子市ボランティアセンターと日野市社会福祉協議会の日野市ボランティアセンターとの協力を得て行われています。

1. 地域から (八王子市・日野市)

ボランティアステーションができたことで、八王子市や日野市から「中央大学の学生の力を貸してほしい!」という声が届くようになりました。相談があったときは、ボランティア掲示板へのチラシの掲示やボランティアをしたい学生が登録しているメーリングリストに情報を流し、呼びかけています。

◀ 2013年度実績 ▶

No	募集内容	月日	募集	応募
1	「ひの新選組まつり」当日イベントスタッフ	5月12日	5人	1人
2	「中央大学・学会日野支部共催学術講演会」当日スタッフ	6月9日	3人	2人
3	「日野市子育て広場 英語遊びの事業」企画・運営ボランティア	6月9日	1人	5人
4	「日野市 介護老人保健施設 夏祭り」当日ボランティア	8月11日	5人	1人
5	「日野市国際交流協会 日本語教室」継続ボランティア	1月18日	若干	1人

<参加学生の声>

- ・ 子どもの頃から地域の行事の手伝いをよくしていたので参加しました。私の出身は沖縄なので、大学に入学してからは地域との交流が少なく何か物足りなさがありました。徐々に地域の活気に触れてとても楽しい一日となりました。商店街の人たちが一丸となって取り組んでいる、そのきずなの強さに元気をもらいました。(ひの新選組まつり参加学生)

2. 学生から

ボランティアステーションができたことで、既存のサークルから「地域でボランティアをしたい」という声が届くようになりました。その場合、日野市ボランティアセンターや八王子市ボランティアセンターへ問い合わせし活動先を探します。

◀2013年度実績▶

1	文化連盟所属「竹桐会」	日野市の高齢者施設の夏祭りで演奏
2	学術連盟所属「古典ギターサークル」	日野市の高齢者施設の秋祭りで演奏

報告編

5. 学内での活動報告事業

1. ボランティア活動写真展

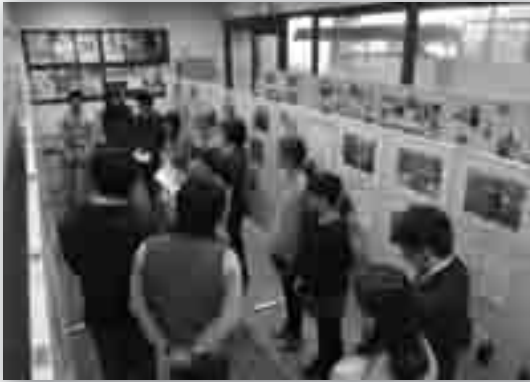
前期および夏季休業を利用して実施した、ボランティア活動の報告を踏まえた写真展を実施することで、多くの学生、教職員、学員方にボランティアステーションの取り組みを知ってもらう機会とした。

- 期 間： 2013年10月22日～29日
場 所： 多摩キャンパス 中央図書館1階
備 考： 学生部主催の夏季ボランティア活動に参加した学生たちの報告を10月23日(水)～25日(金) 昼休みの時間帯に実施。

アンケートより一部抜粋(20枚回収)：

- ・「伝えたい」という想いがとても伝わってくるデザインであり、空間だったと思います。報告でも繰り返されていた温かく迎えてくださった現地の方の様子が垣間見えました。
ボランティアコーディネーター
- ・それぞれのフィールドでそこにいる人たちと交流し、心を通わせている様子が伝わって来ました。被写体の笑顔が良かったです。
文学部・4年
- ・私自身被災地についての情報はメディアでしか見たことがなく、正直全く分かりませんでした。ボランティアを経験した友人の話聞き、ボランティアの深さが伝わりました。
商学部・1年
- ・学生の報告から改めて伝えることの大切さに気づかされました。
明星大学・1年
- ・学生がボランティア活動で自分の方が得ることが多かったという話を大半の学生が言っていたことが印象に残りました。
日野市ボランティアセンター職員
- ・ボランティアの皆さんが暖かな「日常の空間」を作り出すことに力になっていることを感じました。
保護者

■報告会の様子



■写真展示の様子



2. 父母懇談会「キャンパスライフ体験談」

父母懇談会「キャンパス体験談」の一企画として、ボランティア活動報告会を実施した。被災地支援ボランティア学生団体の学生が、「大学生活と被災地ボランティア」をテーマに体験談をトークセッション形式で行うことで、保護者の方々に本学のボランティア活動の取り組みを知って貰う機会とした。

日 程： 2013年11月 9日 午前の部10:30～11:30 午後の部13:30～14:30
場 所： 多摩キャンパス 8305教室
報告学生： 「はまぎくのつばみ」 石山 英美子 (文学部4年)
 「はまらいんや」 白倉 隆之介 (法学部4年)
 喜久里 彩芳 (法学部3年)
 「面瀬学習支援」 市川 洋司 (文学部3年)
 「チーム次元」 鈴木 貴士 (総合政策学部3年)
 「和みの輪」 西 宏明 (法学部3年)
コーディネーター：
午前 学生部ボランティア担当委員 法学部 中澤 秀雄
午後 ボランティアコーディネーター 松本 真理子

保護者からの感想 (一部抜粋)：

それぞれ地に足のついた活動をうかがい、とても衝撃を受けました。これからも息の長い活動を行って頂きたいと思います。是非、今後の活動の一環に後継者育成を行ってください。皆さんの素晴らしさを知らないなんて本当にもったいないと思うほど、素晴らしい発表でした。たくさんの方々に知って頂くよう、広報活動にご尽力ください。

■報告会の様子



学 び 編

6. 防災講座

1. 災害救援ボランティア講座

「災害時、わが身と家族の命を守る」ため、実践的な防災の基礎知識と応急手当・AEDの利用方法などを学び、ひいては学生の非常時対応力の向上に繋げるための「災害救援ボランティア講座」を実施した。

日 程： 2013年 8月5日(月)、6日(火)、7日(水) 9:00～17:00
会 場： Cスクエア 中ホール、立川防災館
協力団体： 災害救援ボランティア推進委員会(総務省消防庁・NHK後援)
参加費： 2,000円
参加者： 学生13名
内 容： 8月5日(月)
 終日： 上級救命技術講習
8月6日(火)
 午前： 講義 災害救援ボランティアの基本
 午後： 立川防災館での災害疑似体験、東京消防航空隊の見学
8月7日(水)
 午前： グループワーク演習 災害時の決断力
 講義 地域・大学の防災マネジメント
 午後： グループワーク演習 災害時のリーダーシップ等

<学生の声>

- ・ 今後発生する可能性が高い大規模地震を含めた震災について、私たちが具体的に何をすべきか考えていくうえでの姿勢を、この講座で持つことができました。今回の講習は正しい知識や災害に対する考え方が身についたとても有意義なものでした。
- ・ 知識、技術の基礎を身につけられたので、実際にボランティア活動に参加していきたいです。



心肺蘇生法



AEDを使った心肺蘇生



震度7の地震を体験

2. 防災特別講座

学生が平時から防災について積極的に考え、取り組むヒントとなるような、実技体験、ゲーム、演習等による講座を行うことにより、広く学生の防災意識の普及啓発と、災害時の安全確保に寄与することを目的とする「防災特別講座」を実施した。

- 日 程： 第1回 10月19日(土) 13:30～15:30
 第2回 11月23日(土) 13:30～15:30
 第3回 11月30日(土) 13:30～15:30
 第4回 12月 7日(土) 10:00～12:00
 第5回 1月11日(土) 13:30～15:30
- 講 師： 宮崎 賢哉 氏
 災害救援ボランティア推進委員会
- 内 容： 第1回 傷病者への応急手当 (実技体験)
 第2回 災害想像力を高める～目黒巻き講座～ (グループワーク)
 第3回 災害情報とコミュニケーション演習 (無線機操作)
 第4回 ゲームで学ぶ防災
 第5回 首都直下地震の被害想定を読み解く!～学生にできること～

<参加学生の声>

- ・ 普段から備えることはもちろんだが、最悪の場合をシミュレーションすることが必要だと思った。知らないことばかりでとても勉強になった。もっと多くの人に知って貰いたい。
 法・3年 男子学生
- ・ 災害に備えておくことは、本当に大切だと改めて思いました。目黒巻きで、早朝地震が起きたことを想定すると、部屋の家具の配置に危険があることも気づくことができました。また、避難所運営ゲームでは、提示された情報をもとにどう対処するのかということの難しさを知ることができました。
 法・2年 女子学生

6. 防災講座



第1回 応急手当 (10/19)



第2回 目黒巻き (11/23)



第3回無線機操作 (11/30)



第4回 避難所運営ゲーム (12/7)



第5回 首都直下地震について読み解く (1/11)

7. シンポジウム

1. 震災シンポジウム

「学生に知ってほしい、本当のボランティア」

東日本大震災から2年が経過し、在学生に被災地の現状の把握や学生ボランティアの役割、今後の支援のあり方などについて学んでもらうことを目的に実施した。また、春季休業期間中に行った被災地支援ボランティア活動の報告会も同日実施した。

- 日 程： 2013年 4月23日(火) 15:00～19:00
- 会 場： 第一部(活動報告会) 多摩キャンパスCスクエア2階 会議室C
第二部(シンポジウム) 多摩キャンパスCスクエア2階 中ホール
- 第一部概要： 春季ボランティア実施報告(15:00～16:30)
- コメンテーター： 村井 雅清 氏 被災地NGO協働センター理事
- 第二部概要： 講演会(60分)
「災害ボランティアの心構え
～阪神淡路大震災・東日本大震災の学びから～」
- 講 師： 村井 雅清 氏
パネルディスカッション(50分)
「中大発!これからの災害ボランティア」
1. 現在の被災地の様子
2. 学生ボランティアに何ができたか、できなかったか
3. これからの復興や防災に携わる学生に何ができるのか
- パネリスト： 村井 雅清 氏
松本 真理子 ボランティアコーディネーター
西 宏明 学生団体「和みの輪」代表(法学部3年)
- コーディネーター： 中澤 秀雄 学生部ボランティア担当委員(法学部教授)
- 参加人数： <第一部> 学生団体所属学生 約15名 ※一般非公開
<第二部> 約30名
- 協 力： 学生団体「和みの輪」

<参加者の声>

- ・ ボランティア経験の浅い自分にとって、先生の話は勇気づけられた。
- ・ 自分が貢献できることを考えていきたい。
- ・ ご自身が実際に経験された阪神淡路大震災での出来事を例に初心者ボランティアの重要性がひしひしと伝わってきた。
- ・ ボランティアといってもその内容は多種多様だということが分かり、個別のニーズに合わせたきめの細かいサポートができるのもボランティアならではのことで学んだ。

7. シンポジウム



講師 村井雅清氏



講演の様子



パネルディスカッションでの様子



法学部3年 西さん



講演の様子



左：中澤法学部教授



左：ボランティアコーディネーター松本

8. スキルアップセミナー

1. ボランティアマナー講座

ボランティア活動を行う学生が自ら考え、立ち居振る舞いや仕草など「よき意味の他者視線」を心得た行動を、ボランティア活動を行う現場で行い、相手に対してあたたかい善意の心を自然に伝えられることを目指すための「ボランティアマナー講座」を実施した。

- 日 時： 2013年7月13日(土) 13:30～15:00
会 場： 6408教室
参加者： 学生6名
講 師： 島津 和代 氏
日本体育大学 教職教育研究室 非常勤講師
内 容： 研修形態 グループワーク形式(個人ワーク・グループワーク)

1. 基本的なマナー
2. 気持ちの良い挨拶
3. 相手が話しやすい“聞く態度”とは
4. 感謝の伝え方
5. 正しい敬語の使い方
6. 好感の持てる服装

<学生の声>

- ・改めて小さなこと一つ一つが人と繋がっていく上で大切なことであると学びました。今まで気恥ずかしく思っていた分かりやすい返事など、今後少しでも習慣としていきたいと思いました。
- ・思っていることを伝えたいときは、相手に分かるように態度に示さなければならないと思いました。普段の学生生活ではお会いすることが出来ない講師の方に出逢え、とても貴重な機会でした。
- ・話を聞くときに相手に体を向けること、相手に呼ばれたら直ぐに行くことなど、良く言われていることだが、なかなかできていなかったことに気がつけました。



講座の様子 講師：島津氏

2. ボランティア学生団体

代替わりのためのワークショップ

「被災地支援ボランティア学生団体」の代替わりがスムーズに行えるよう、各々の団体のボランティア活動の理念やスピリットの重要性を再確認し、これまでの活動の振り返りと課題の洗い出しを行い、今後の活動に生かすためのワークショップを実施した。

日 時： 2013年12月7日(土) 13:00～17:00 ※17:00～懇談会
場 所： 6408教室
参加者： 被災地支援ボランティア学生団体所属の学生 約30人
講 師： 川中 大輔 氏
シチズンシップ共育企画代表



講師：川中氏



ワークショップの様子



団体毎に意見共有



集合写真

3. 心の勉強会「震災に遭った子どものころ」

気仙沼市面瀬小学校でボランティア活動を行う学生団体「面瀬学習支援」から発案があり、本学文学部 山科満教授による心の勉強会「震災に遭った子どものころ」を実施した。PTSD（心的外傷後ストレス障害）や、子どもに「安心感」を与えるケアの基本などを学び、今度の活動に生かせるものとなった。

日 程： 2014年2月4日 11:00～13:00
場 所： 多摩キャンパス 6408教室
参加人数： 10人

<参加学生より>

気仙沼市面瀬地区で子どもたちへの学習支援を初めて2年が経ち、震災後の彼らの心身の成長を感じながら、それを観察し記録することに努めてきたが、臨床の専門家でも教育の専門家でもない私たちは震災のような外傷体験・喪失の体験がその人の生活にどのような影響を与えるかということについて正しい知識を身につけていなかった。また、こうしたいわば個人の内側の経験に、学生である私たちがどのようにアプローチし、どこまで深くかかわるべきかという判断ができずにいたので、私たちにとって重要な学びの会となった。

今回の勉強会で、外傷体験の影響は人それぞれであり、独特な「話せない感」があることを学んだ。大人ほど多くの言葉をもたないであろう子どもたちに、言葉以外の表現で私たちに伝えることがあるかもしれないし、むしろ大人よりも端的な言葉で語ることもあるかもしれない。震災の体験の本人にとっての深刻さを改めて認識し、子どもたちに真摯な態度で向き合うことの大切さを今一度確認した。また、震災後の生活事情・社会事情の変化に伴い2年、3年という長い時間をかけて精神的な反応が現れることを学んだ。側に寄り添いながら、本人の話すタイミングや考え方を尊重しながら、長期的な支援をこれからも考えていきたい。子どもと接する態度として、ゆっくり話を聞く時間を確保したうえで臨むことや、私たちの中で子ども一人ひとりの様子や変化の情報を共有して観察の目の連続性を保っていくことが大切であることを学んだ。メンバー体制も見直したい。“話してくれてありがとう”“ひょっとすると・・・”のようなささいな言葉が安心感を与えるということも今までの活動で気付かなかったことである。外傷体験を「3年前の震災による心の傷」というように、直線的な時間軸の過去の一点の悲しい出来事のように見誤らず、日常生活と発達という時間の流れの中で本人の言葉を大切にしながら接していくことが、支援者として重要であることが分かった。彼らの生活の場である家庭や学校機関ともより良い関係を築いていく必要があると感じた。

(文学部・3年・男子学生 面瀬学習支援所属)

資料編

9. ボランティアステーション 利用集計

	個別相談	ボラステルーム利用
4月	25	0
5月	11	77
6月	13	107
7月	17	133
8月	5	18
9月	2	37
10月	10	92
11月	10	73
12月	10	83
1月	5	34
計	108	654

総合計	762
-----	-----

(2013年4月1日～2014年1月31日迄)

相談者統計

		相談者	男	女	法	経	商	文	総	理	不	1	2	3	4	他	震災	教育	福祉	国際	構内	他
1	4月	25	17	8	8	3	2	3	5	0	4	6	3	12	2	2	12	3	4	5	1	6
2	5月	11	5	6	3	1	2	1	1	0	3	3	3	1	1	3	1	1	1	1	2	9
3	6月	14	5	9	7	1	2	0	2	0	2	11	0	0	1	2	9	0	0	6	0	5
4	7月	17	7	10	5	7	2	0	1	0	2	3	1	10	0	3	14	5	7	5	4	6
5	8月	5	5	0	0	3	0	2	0	0	0	1	1	3	0	0	2	1	1	1	1	1
6	9月	2	2	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	1	0	0	1	0	0	0	0	1
7	10月	10	6	4	4	0	4	0	1	0	1	2	2	2	3	1	3	3	0	1	0	4
8	11月	10	3	7	2	3	1	2	2	0	0	3	5	1	1	0	6	2	0	1	1	3
9	12月	10	7	3	1	4	1	1	1	1	1	2	5	1	0	2	5	1	0	1	1	2
10	1月	5	2	3	2	2	0	0	0	0	1	2	2	0	0	1	3	1	1	1	1	3
	合計	109	59	50	32	24	14	11	13	1	14	34	22	31	8	14	56	17	14	22	11	40

(2013年4月1日～2014年1月31日迄)

10. 震災への対応(ボランティア活動)

2011.3.11～

時系列	活動名	活動場所/活動内容等	活動団体/活動人数等
2011年 3/25	第1回構内募金活動	募金活動	学生ボランティアスタッフ
4/13～15	震災により不安を抱える新入生と在学生との相談会	相談会	学生ボランティアスタッフ
4/21	第2回構内募金活動	募金活動	学生ボランティアスタッフ
4/28	大学病院による被災地域への医療支援の試み	講演会	中原邦晶氏(北里大学医学部脳外科医) 参加者 65名
4/28	第1回ランチミーティング	震災により不安を抱える新入生と在学生との交流会	学生ボランティアスタッフ
4/28	第3回構内募金活動	募金活動	学生ボランティアスタッフ
4/29	第4回構内募金活動	募金活動	学生ボランティアスタッフ
5/2	第5回構内募金活動	募金活動	学生ボランティアスタッフ
6/23	報告会・事前研修会	ボランティア活動報告、講演会	報告：学生3名、公演：宮崎賢哉氏(災害救援ボランティア推進委員会) 参加者 80名
7/12	ボランティア派遣学生募集開始	気仙沼市大島	計3回派遣(250名募集) 主催 信行寺 浅野氏(OB)
7/27	第1回事前説明会・事前研修会	事前説明と活動にあたり、DVDの上映	夏ボラ(大島)活動参加者対象
7/28	第2回事前説明会・事前研修会	事前説明と活動にあたり、DVDの上映	夏ボラ(大島)活動参加者対象
8/1～4	第1回 ボランティア派遣(気仙沼・大島)	気仙沼市大島 瓦礫の撤去	学生43名、引率職員2名
8/5～7	仙台七夕祭り	仙台市 イベント運営の手伝い	学生1名、引率職員1名
9/5～8	第2回 ボランティア派遣(気仙沼・大島)	気仙沼市大島 瓦礫の撤去	学生89名、引率職員3名
9/12～15	第3回 ボランティア派遣(気仙沼・大島)	気仙沼市大島 瓦礫の撤去	学生91名、引率職員3名
10/12	夏ボラ(大島)第1,2,3回ボランティア派遣報告会	ボランティア活動報告	学生ボランティアスタッフ、ボランティア参加学生(約100名)
12/14～15	冬季ボランティア派遣事前説明会	ボランティア事前説明会	活動参加者対象
12/15	クリスマスカードプロジェクト	被災地の子ども達宛にクリスマスカードを作成	集計枚数225枚

10. 震災への対応(ボランティア活動) 2011.3.11～

時系列	活動名	活動場所/活動内容等	活動団体/活動人数等
2011年 12/23～26	第1クール冬季ボランティア派遣	気仙沼市面瀬地区 仮設住宅コミュニティの運営全般	学生5名、引率教職員2名
12/26～29	第2クール冬季ボランティア派遣	仮設住宅コミュニティの運営全般(気仙沼市面瀬) 瓦礫撤去、泥かき等(気仙沼市街地)	学生6名(面瀬)、学生11名(大島) 引率教職員2名
12/29～ 2012/1/3	第3クール冬季ボランティア派遣	仮設住宅コミュニティの運営全般	学生4名、引率教職員2名
2012年 1/3～6	第4クール冬季ボランティア派遣	仮設住宅コミュニティの運営全般(気仙沼市面瀬) 瓦礫撤去、泥かき、写真の洗浄等(気仙沼市街地)	学生3名(面瀬)、学生3名(大島) 引率教職員1名
1/6～9	第5クール冬季ボランティア派遣	仮設住宅コミュニティの運営全般(気仙沼市面瀬) 瓦礫撤去、泥かき等(気仙沼市街地大島)	学生3名(面瀬)、学生5名(大島) 引率教職員3名
1/14	「白門のつどい」 学員会主催	交流会等	学員会、希望参加学生、附属高校生等
1/16～21	「中大生による東日本大震災支援活動」 写真展	支援活動での写真の展示	FLP崎坂ゼミ、FLP国際協力プログラム・Chuo Support for 3.11、学生課、復興支援団体「和みの和」
1/20	冬季ボランティア報告会	ボランティア活動報告会、DVDの上映、ディスカッション	ボランティア参加学生、教職員(約50名)
1/28	早稲田大学シンポジウム	6大学による震災への取り組み、パネルディスカッション	教員1名、学生2名の発表
3/1、5	春季ボランティア事前説明会	全体事前説明、各地域での活動内容	春ボラ活動参加者対象
3/12～15	第1クール春季ボランティア派遣	海岸清掃、植樹等(気仙沼市大島) 学習支援(気仙沼市反松地区) 仮設住宅コミュニティの運営全般(気仙沼市面瀬) 聞き取り調査(気仙沼市尾崎地区)	学生34名、引率教職員3名
3/15～18	第2クール春季ボランティア派遣	海岸清掃等(気仙沼市大島) 学習支援(気仙沼市反松地区) 仮設住宅コミュニティの運営全般(気仙沼市面瀬) 個人宅の清掃、植樹等(陸前高田市)	学生27名、引率教職員5名

時系列	活動名	活動場所/活動内容等	活動団体/活動人数等
2012年 3/18～21	第3クール春季ボランティア派遣	樺山の清掃活動等(気仙沼市大島) 学習支援(気仙沼市反松地区) 仮設住宅コミュニティの運営全般(気仙沼市面瀬) 聞き取り調査(気仙沼市尾崎地区)	学生21名、引率教職員4名
3/21～24	第4クール春季ボランティア派遣	海岸の清掃活動等(気仙沼市大島) 仮設住宅コミュニティの運営全般(気仙沼市面瀬)	学生23名、引率教職員3名
3/26～4/8	面瀬学習支援活動	学習支援活動 気仙沼市面瀬	学生18名、引率教職員2名
4/23～28	春ボラ写真展	多摩キャンパス中央図書館1階 春ボラ活動写真の展示	学生課ボランティアスタッフ
4/27	春季ボランティア報告会およびシンポジウム「気仙沼・陸前高田とのぎりすび」	多摩キャンパスCスクエア中ホール	講師：黒田裕子氏(特定非営利活動法人阪神高齢者・渉外支援ネットワーク理事長) 小野寺英彦氏(三陸新法編集局長) 武蔵和敏氏(建築業・陸前高田市在住) 参加者70名
4/27	東日本大震災被災地支援学生団体ネットワーク設立		
	気仙沼市大島でのボランティア活動 事前説明会		ボランティア活動参加対象者
4/30～5/3	気仙沼市大島でのボランティア活動	気仙沼市大島 樺山の清掃活動等	学生20名、引率職員1名 主催 信行寺 浅野氏(OB)
7/2～4	東日本大震災今後の説明会	学生団体の紹介と募集	説明団体4団体 参加者 3日間合計80名
8、9月	東北学院大学主催夏合宿 ・気仙沼市唐桑地区での活動 ・山元町での活動 ・七ヶ浜仮設足湯ボランティア ・仙台津波支援復興センターでの活動 ・ReRootsでの活動	宮城県	学生59名、引率職員1名
8/28～31 9/3～6	気仙沼市大島でのボランティア活動	気仙沼市大島 樺の植樹、海岸活動等	第1クール 学生21名、引率職員1名 第2クール 学生24名、引率職員1名 主催 信行寺 浅野氏(OB)

10. 震災への対応(ボランティア活動) 2011.3.11～

時系列	活動名	活動場所/活動内容等	活動団体/活動人数等
2012年 8、9月	学生団体によるボランティア活動 ・チーム次元 ・はまぎくのつぼみ ・はまらいんや ・面瀬学習支援 ・チーム杉村 ・新原ゼミ有志 ・「熱血! 気仙塾」陸前高田支援チーム ・卓球同好会 ・Chuo Support 3.11	宮城県、岩手県	延べ学生107名、引率教職員4名
10/3	夏季ボランティア活動報告会	ボランティア活動報告会	参加者40名
10/28	ホームカミングデーでの写真展	ボランティア活動写真展示、学生による報告	学生スタッフ8名
11/15	信行寺「絆基金」からの活動助成説明会	11/15～募集開始	主催：信行寺、対象：学生団体
12/5、6	第3回団体説明会	各団体の冬ボラ募集	参加者：各日30名
12月～ 2013年1月	冬ボラ	学生団体主催	はまらいんや はまぎくのつぼみ 面瀬学習支援
2/4	春ボラ説明会	学生課主催 ・「熱血! 気仙塾」 ・「子ども気仙沼学」 学生団体主催	参加者：70名
2/9、19	「熱血! 気仙塾」事前勉強会	事前勉強会	武蔵和敏氏 法政・仁平先生 中大参加者、法政大仁平ゼミ生
2/23	スキルアップセミナー (講演会)	講演会 ボランティアコーディネーターと団体代表者との顔合わせ	松本真理子氏、団体代表者
3/2～5	「熱血! 気仙塾」2013春 (中大×法政大)	陸前高田市	中大生7名、法政生12名
3/26、27、 29、31、 4/2	「子ども気仙沼学」2013春 (学生部×学生団体「面瀬学習支援」)	上沢三区自治会館	参加者(延べ)：106名 中大生：12名 引率教員：2名
3、4月	春ボラ	学生団体主催	はまらいんや チーム次元 はまぎくのつぼみ 面瀬学習支援
2013年 4月1日	ボランティアステーション開設	学生課内	ボランティアコーディネーター 1名就任
4/11、15	新入生歓迎団体説明会	新入生対象	参加者：各日40名
4/23	2013春ボランティアシンポジウム 講師：村井雅清氏	学生課主催	参加者：40名

時系列	活動名	活動場所/活動内容等	活動団体/活動人数等
2013年 4/25. 26	被災地スタディーツアー説明会	25日 後楽園 26日 多摩	25日 参加者 7人 26日 参加者 50人
5/12	日野市仲介ボランティア 「新選組祭り」当日手伝い	日野市	1人
5/18	クリーン作戦	多摩キャンパス周辺	参加者 7人 (うち留学生4人)
5/21～	日野市仲介ボランティア 「英語遊び」継続	日野市	4人
5/24～26	被災地スタディーツアー 新入生対象、貸切バス	宮城県女川町	新入生：25人(応募49人) 先輩スタッフ：2人 引率職員：2人
6/9	日野市仲介ボランティア 「講演会」当日手伝い	日野市	1人
6/17	日野市仲介ボランティア 中央大学サークルによる演奏発表	日野市	和楽器演奏サークル竹桐会メンバー
7/13	ボランティアマナー講座	スキルアップセミナー	講師：島津和代氏(日本体育大学教職 教育研究室非常勤講師) 参加者 6名
8、9月	2013夏の東北ボランティア 女川スタディーツアー(8/19～23) 女川学習支援(9/10～12) 吉里吉里国(9/10～12)	学生部主催 宮城県女川町 岩手県大槌町	女川スタディーツアー 学生6名 引率2名 女川学習支援 学生6名 引率2名 吉里吉里国 学生5名 引率1名
8/5	仙台七夕まつりボランティア	仙台市商工会主催	参加10名
8/26～31 9/2～7	気仙沼企業インターンボランティア 活動先：フジミツ岩商、阿部長商店	東北学院大学主催、復興 庁共催	学生 各クール4名 引率4名
8、9月	学生団体の活動	岩手県宮古市 宮城県気仙沼市面瀬、大 島 福島県相馬市	はまぎくのつぼみ はまらいんや 面瀬学習支援 チーム次元 和みの輪
10/19	第1回 防災特別講座	傷病者への応急手当(実技 体験)	災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉 氏
10/22～29	ボランティア写真展 (報告会：10/23～25昼休み)	多摩キャンパス 中央図 書館1階 展示スペース	学生団体 2013夏ボラ参加学生 クリーン作戦参加学生
11/9	父母懇談会(キャンパス体験)でのボラ ンティア報告 テーマ「大学生生活と被災地ボランティア」	主に在学生、受験生の保護 者対象	学生団体による報告
11/10	ひの市民活動フェア	日野市市民ふれあいホー ル	学生2名 引率2名
11/23	クリーン作戦 秋	地域清掃活動	学生11名 教職員4名 一般3名

10. 震災への対応(ボランティア活動) 2011.3.11～

時系列	活動名	活動場所/活動内容等	活動団体/活動人数等
2013年 11/23	第2回 防災特別講座	目黒巻き講座	災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉 氏
11/30	第3回 防災特別講座	無線機操作	災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉 氏
12/7	第4回 防災特別講座	ゲームで学ぶ防災 避難所運営ゲーム	災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉 氏
12/7	学生団体引継ぎのためのワークショップ	学生団体の引継ぎ会	シチズンシップ共育企画 川中大輔氏 参加 約30名
12/10	クリーン作戦ミニッツ(昼休み)	地域清掃活動	参加 6名
12/13、14	東北学院大学シンポジウム パネルディスカッションに登壇 (コーディネーター・松本)	東北学院大学土樋キャン パス	職員 2名
12月～ 2014年1月	冬季東北ボランティア 学生団体		はまぎくのつばみ はまらいんや 面瀬学習支援 チーム次元
12/17～ 1/31	フィリピン募金	構内募金	集計金額 5,310円
1/7	クリーン作戦ミニッツ(昼休み)	地域清掃活動	参加 8名
1/11	第5回 防災特別講座	首都直下地震の被害想定 を読み解く!	災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉 氏
2/3	心の勉強会 震災に遭った子どものこころ	スキルアップセミナー 主催:面瀬学習支援	講師:山科満(文学部教授) 学生10名 職員2名
2/8	市民社会をつくるボランティアフォーラム TOKYO2014	飯田橋セントラルプラザ	学生2名 職員1名
2/18	結の場マルシェ 出店:阿部長商店、八葉水産	宮城復興庁主催 三井住友海上駿河台ビル	学生11名 職員1名
2/24～3/1	気仙沼インターンボランティア 受入企業先:八葉水産	東北学院大学主催 宮城復興庁共催	学生 6名 引率3名
2/28	日本財団ボランティアセンターとの協定	協定	中央大学×日本財団ボランティアセン ター
3/8	ボランティアマナー講座	スキルアップセミナー 主催:面瀬学習支援	学生7名
3月	春季東北ボランティア 学生団体	宮城県気仙沼市面瀬、大 島	はまらいんや チーム次元
3/20～25	春季ボランティア 合同ボラバス	南三陸志津川自然の家	女川スタディーツアー はまぎくのつばみ 面瀬学習支援 チーム次元 学生22名 引率3名
4/1～	中央大学ボランティアセンター開設	呼称変更	

11. 協力・連携

<順不同・敬称略>

大学連携間災害ボランティアネットワーク（拠点校：東北学院大学） ※2011年加盟
 明星大学ボランティアセンター
 日野市社会福祉協議会
 八王子市社会福祉協議会
 災害救援ボランティア推進委員会 宮崎賢哉
 NPO法人阪神高齢者・障害者支援ネットワーク 黒田裕子理事長
 NPO法人日本ホスピス・在宅ケア研究会所属の看護師の皆さん
 気仙沼市議会議員 佐藤輝子
 面瀬中学校仮設住宅 尾形修也自治会長
 上沢三区自治会（高橋紀一会長、藤田鋭一副会長、会計藤田重門ほかの皆さん）
 上沢三区自治会婦人部 三浦洋子先生
 面瀬地区振興協議会 熊谷幹夫会長、藤田裕喜事務局長
 気仙沼市 藤田新聞店
 面瀬地区自治会長連絡協議会 佐藤正儀会長
 NEO（なんでもエンジョイ面瀬クラブ）小池良光理事長
 面瀬地区下沢自治会 神谷和馬会長
 面瀬地区千岩田自治会 梶谷正常会長
 気仙沼市千岩田在住 小野寺憲雄・憲一
 気仙沼市千岩田在住 小野寺征貴
 面瀬地域ふれあいセンター 藤田正人前館長
 気仙沼市反松公園仮設住宅
 気仙沼市気仙沼中学校住宅自治会
 気仙沼市気仙沼公園住宅自治会
 宮古市社会福祉協議協会 葛浩史事務局長、小林さつき
 宮古市役所 盛合光成、山崎忠弘
 清寿荘在宅介護支援センター 田代
 鍬ヶ崎学童の家
 みやこ災害FM 佐藤省次
 気仙沼市立面瀬小学校（長田勝一校長、大森教頭、村上教務主任、熊谷前教頭）
 気仙沼市立面瀬中学校
 三陸新報社 小野寺英彦編集局長、今川悟記者
 リアス・アーク美術館 山内宏泰学芸員
 気仙沼高校 高橋誠子（元）教諭
 本吉響高校 千田健一校長
 気仙沼市松岩 煙雲館
 熱血！気仙塾 武蔵和敏塾長
 気仙椿ドリームプロジェクト 佐藤武志
 社会福祉法人大洋会 青松館
 宗教法人信行寺 浅野弘毅
 中央大学学員会

11. 協力・連携

女川桜守りの会のみなさま、遠藤定治会長、藤中郁生
女川町観光協会 遠藤琢磨
女川町立女川中学校
女川魚市場買受人協同組合
女川さいがいFM
きぼうのかね商店街のみなさま
ダイシン／カフェさくら 島貫洋子
小野寺茶舗 小野寺武則
アートギルド 崎村周平
RIVER SON 川村辰徳
金華楼 鈴木康二
NPO法人NPOカタリバ コラボ・スクール女川向学館
トレーラーハウス宿泊村 EL FARO 佐々木里子
蒲鉾本舗高政
東北復興応援団白金支部
気仙沼大島 マルエ水産 小松俊浩
気仙沼大島 民宿
NPO法人相馬はらがま朝市クラブ理事長 高橋永真
志津川自然の家
被災地NGO協働センター 村井雅清代表
日本財団ボランティアセンター 西尾雄志代表理事
東京ボランティア・市民活動センター
岩手県奥州市役所 渡辺和也政策企画課長
復興支援奥州ネット 大江昌嗣代表、浪越和彦副代表以下の皆さん
岩手県奥州市 社会福祉法人福寿会
シチズンシップ共育企画 川中大輔
ボランティアマナー講師 島津和代
NPO法人吉里吉里国 理事長 芳賀正彦
株式会社フジミツ岩商
株式会社阿部長商店
株式会社八葉水産
仙台商工会議所
紫神社社務所
亀の湯

12. メディア掲載

1. 新聞記事

三陸新報 2013/08/23

「第3のふるさと」
復興の助っ人たち

「気仙沼は第3のふるさと」
宮崎 沙里さん(28)

宮崎沙里さん(28)は、被災地である気仙沼市を訪れ、ボランティア活動に参加している。写真：三陸新報

宮崎沙里さん(28)は、被災地である気仙沼市を訪れ、ボランティア活動に参加している。写真：三陸新報

三陸新報 2013/08/23

海藻紙作りに挑戦
而瀬小で体験学習

中央大学

海藻紙を作ったうち
れ作りも体験した吉田
ひなたさん(前掲小
生)は「海藻が紙にな
るなんてびっくり。い
ろいろな人に教えた
い」と喜んでた。
原料のホソシジメを
は、無類のいかだや
ロープに付着する。展
介者で、高橋さんが
30年ほど前に海産物へ
の活用を考案、海の魅
力を普及する天網など
で人気だったが、震災
で無類無類が被害を受
けて原料が手に入らな
くなくなった。
この日は、震災前に
尾瀬地区の海で収穫し
ていたホソシジメを
利用、高橋さんは「海
藻紙作りを前掲できる
ほどの原料はまだ手に
入らないが、体験を通
して子供たちが元気に
なり、海の環境をより
よく保てるようになってほ
希い」と願っている。
なお、中央大学の学
生たちが24年春から長
期休みのなびに行っ
た学習は、今週は体験
は体験を重視、海藻紙
作りのほか、而瀬ふれ
あい音頭、カッパやワ
カメを使った料理体験
を通して、ふるさとに
ついて学んでほしいと
いう。

海藻紙作りを楽しむ子供たち

2. テレビ放送

月 日	放送局／番組名	内 容
2014年3月3日	NHK仙台／てれまさむね	大学間連携春ボラ復興支援インターン活動の紹介
2014年3月11日	日本テレビ／NEWS ZERO	大学間連携春ボラ復興支援インターン活動の紹介

3. 大学広報誌

HAKUMON Chuo

2012年冬号

気仙沼に恩返しをしたい～震災という経験を経て～

東日本大震災【被災地】



東日本大震災の被災地は2回目の冬を迎えている。人生を変えた2011年3月11日、震災地に響きの足音は残っている。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。

東日本大震災の被災地は2回目の冬を迎えている。人生を変えた2011年3月11日、震災地に響きの足音は残っている。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。

東日本大震災の被災地は2回目の冬を迎えている。人生を変えた2011年3月11日、震災地に響きの足音は残っている。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。

東日本大震災の被災地は2回目の冬を迎えている。人生を変えた2011年3月11日、震災地に響きの足音は残っている。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。

2011.3.11



東日本大震災の被災地は2回目の冬を迎えている。人生を変えた2011年3月11日、震災地に響きの足音は残っている。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。

東日本大震災の被災地は2回目の冬を迎えている。人生を変えた2011年3月11日、震災地に響きの足音は残っている。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。

東日本大震災の被災地は2回目の冬を迎えている。人生を変えた2011年3月11日、震災地に響きの足音は残っている。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。

東日本大震災の被災地は2回目の冬を迎えている。人生を変えた2011年3月11日、震災地に響きの足音は残っている。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。

東日本大震災の被災地は2回目の冬を迎えている。人生を変えた2011年3月11日、震災地に響きの足音は残っている。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。

東日本大震災【被災地レポート】 新人生へ “冒険の旅”の始まりだ

宮城県気仙沼市で被災した自衛隊之介さんは、中央大学法学部4年で被災地を支援するボランティア活動を展開中だ。

被災地から学生の立場でレポートを綴っている。

夢中になろう

新入生の皆さん、入学おめでとうございませう。これからの4年間、「大学生生活」の20年を過ごしていただきます。

「高校生活の延長みたいな感じかな」「大学の4年間って何か長そうだな」と思っているなら、その考えは捨ててください。

4年生になった今だから実感できることですが、大学生生活は本当にあっという間に過ぎます。まずは、東京圏内だけでなく、日本全国、世界へ広がっています。私は1年生から2年生と上身的な成長が大震災に遭遇し、2年生の夏から震災ボランティアを始め、1年くらい活動が止まっていた。周りでは4年生になっていました。

大学生生活を卒業したものにすることは、どうしたいか。私は「夢中になれることに打ち込む」と答えます。中央には、資格試験合格を目指して勉強に励む学生から、ボランティア活動に打ち込む学生まで、生き生きとした学生生活が展開されています。

被災地の方を支援したいという思いがあります。目指しているものが、私の手の届かない高いものがあるからといって、はたしてそれが実現できるかは分かりませんが、被災地の方を支援したいという思いがあります。目指しているものが、私の手の届かない高いものがあるからといって、はたしてそれが実現できるかは分かりませんが、被災地の方を支援したいという思いがあります。

被災地の方を支援したいという思いがあります。目指しているものが、私の手の届かない高いものがあるからといって、はたしてそれが実現できるかは分かりませんが、被災地の方を支援したいという思いがあります。

被災地の方を支援したいという思いがあります。目指しているものが、私の手の届かない高いものがあるからといって、はたしてそれが実現できるかは分かりませんが、被災地の方を支援したいという思いがあります。

被災地の方を支援したいという思いがあります。目指しているものが、私の手の届かない高いものがあるからといって、はたしてそれが実現できるかは分かりませんが、被災地の方を支援したいという思いがあります。

2011.3.11



東日本大震災の被災地は2回目の冬を迎えている。人生を変えた2011年3月11日、震災地に響きの足音は残っている。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。

東日本大震災の被災地は2回目の冬を迎えている。人生を変えた2011年3月11日、震災地に響きの足音は残っている。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。

東日本大震災の被災地は2回目の冬を迎えている。人生を変えた2011年3月11日、震災地に響きの足音は残っている。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。

東日本大震災の被災地は2回目の冬を迎えている。人生を変えた2011年3月11日、震災地に響きの足音は残っている。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。

東日本大震災の被災地は2回目の冬を迎えている。人生を変えた2011年3月11日、震災地に響きの足音は残っている。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。人の心には消えることのない思い出が沁み込んでいる。

2013年夏号

【特集】ボランティアなう

ボランティアを

～中大初のボランティアコーディネーター、松本真理子さん～

ボランティアをしたい学生の支援窓口として「中央大学ボランティアステーション」が4月1日に設立された。同所の「顔」となるボランティアコーディネーターに経験豊かな松本真理子さんが着任し、5月の東日本大震災・被災地ツアーでは大震災を風化させない目標とした。

文と写真 学生記者 澤田聖門(総合政策学部2年)



【写真】松本真理子氏(1981年10月26日、千葉県船橋市出身、専攻 船橋東英一総合大学経済学部2年、2人姉妹の長女。「新聞は最初から読ませてもらった」)

ボランティアコーディネーターとは、どのような仕事をするのか。

「学生が何か社会に貢献できるような活動をしたいと強く望みながらも、何かから始めていいか、どうやってボランティアに参加すればいいのかが分からないという学生たちと、学生の手を必要としている地域を結び付けます」松本さんの回答は明快だった。

「ボランティア団体のカタログを見せるだけでなく、学生の話を耳を傾け、彼ら彼女らに合ったボランティアを一緒に探したい」

「一緒に」という言葉に力が入った。

学生経験を原動力に

中大着任前は、震災後、宮城県女川町に開設された、子どもたちの学習指導などのケアを行う「女川町学習館」で復興支援をしていた。女川は津波で壊滅的な被害を受けた町。向学館は、NPO(非営利組織)「ナタリ」が寄付を集めて地域と協働で運営する。被災地の子どもを支える活動だ。

ここでは地域コーディネーターとして、頻々と変わる被災地のニーズを拾い、支援活動を適切なものに調整する役割を務めた。

明治大学の学生だったころは、現在のイメージの行動派というタイプではなく、勉強に励むのみだった。「このまま何もしていないのはもったいない」。モヤモヤとしていた自分を奮い立たせ、大学の外の世界へ飛び込んだ。

一人

増やしたい

14

そして、友人たちとNPOを立ち上げた。高校生が主体的に自分の進路を選ぶきっかけを提供する団体だ。これが初めてのボランティアとなる。「一人ひとりが変われば社会は変わる。新しい世界の中をつくりたい」と思っていました。

しかし世間のNPOやボランティアへの理解度は低く、「NPO? なにそれ?!」と門前払いされることも。「新しいことがすぐに受け入れられない

でも多く

のは当たり前。そうした社会の壁にぶつかる経験をして、初めて大人になるんだと思います」

この時点で将来ボランティアに携わりたかったと明瞭に思っただけではない。「大学生活4年間は、それまでの18年間よりも、多様な人と出会いました。就職活動をしなかったことは、目の前の人のやりかたに思っていることを応援したいということだけでした」

それに一番近いと思い、「社会教育主宰」の資格を取得し、卒業後は千葉県の公民館に勤務、町づくりの仕事に携わった。

その後、地域コミュニティ紙「船橋よみうり」(発行部数約12万5000部)で記者を5年間勤め、我が街を良くしようと取り組む地域の人々を伝え続けた。

あの夢まわしい「3.11」が起こる。町が根こそぎなくなるようなこの出来事に心を揺さぶられて思った。「町の再生に携わりたい」。10月には女川にいて、NPOの呼びかけでボランティアに本格的に取り組んだ。

青年期を、友人が「中大でボランティアコーディネーターの仕事があるみたい」と連絡をくれた。

中大入りには考えることが多かったという。被災地について感じるのは、忘れ去られる危機感。東京発祥の被災地報道の量は減り、原発や悲惨な出来事に限り大きく扱われる。現場レベルでも、ボランティア活動者と被災地のニーズが噛み合わない現状も新たな課題になっていた。被災地の「今」が東京に伝わっていない痛感でした。

東京へ行って、被災地の現状に詳しい私がパイプ役となり、いま求められるボランティア活動への理解を深めよう。

ここで決定打となったのは、大学生時代に感じたあの「モヤモヤ」だ。学生ころ、彼女自身も「このまほもせずわかっていひのどうにか」という無難感、「何か自分でできることはないか?」という情熱を感じていた。同じよ

15

うな思いを持つ学生の中で押し、一歩踏み出すための手助けをしたいと思いついたという。

「ボランティアは、相手との人間関係や社会の課題や矛盾を前提に繋がっています。〈けろろ〉になることもありますが、学生たちには、そうした現実に向き合うことで少しでも成長してほしい。それが自分と社会の未来をつくることになり、本物のボランティアになっていくと思います」

学生の熱意を東北の被災地に繋げる仕事かという思いが、ボランティアコーディネーターにつながった。

きっかけづくり

狭いも新たな中大ボランティア活動には、Facebookによる情報交流で800人以上(6月現在)が関心を示している。八王子や日野の社会福祉協議会と連携し地域のボランティア活動情報を呼びかけ、5月には被災地ツアーツアーを行った。

「社会に出ていく必要があり。その“きっかけ”をたくさん作りたと思っています。目標はリアルにはこれだけですが」

中大唯一のボランティアコーディネーター松本真理子さんが語る。学生への熱意とボランティアに対する意識の深さは、「話題の嵐」を巻き起こすほどの潜在力を持っている。

【米国NPO事情】
NPOは人気ランキング第1位
米国の立憲大学の人気ランキングは①オールド・ディズニー・カンパニー②国連本部③NPO④Google⑤国務省。
※NPOは非営利

被災地 スタディーツアー in 宮城県女川町

あの日から2年経とうとしています。「もうボランティアにはやれることはない」と考える人も少なくないように感じます。しかし、そうではないことを一人でも多くの学生に気付いてもらうため、5月24～26日、宮城県女川町への「被災地スタディーツアー」を行い、また被災地に行ったことのない1年生25人を連れていきました。

女川町は人口の1割を失い、8割の建物が壊れ、

16

【特集】ボランティアなう



被災地スタディーツアーに参加した学生と「女川町留守の会」のみなさん(左側は松本コーディネーター)

被災率は被災地内最大です。高台から町を見下ろすと更地が広がっています。そこにかつて人々の営みがあったこと、3.11に起きたこと、これらどう復元するのかが想像することは容易ではありません。

そこで、町の人々に話を聞きました。女川町の木「桜」を模範し魅力ある町に復活させようという「女川町留守の会」のメンバー、仮設酒店の店主、震災後に東京から戻ってきて復興に携わる20代、津波に流されたけれど助かった人、町のために役に立ちたいと話す高校生など、年齢も立場もさまざまです。

「この店が、町、東北、日本、世界を繋ぐ灯台になるようにしたい」

「みなさんには同じ思いも味わってほしい。私の被災経験を役立ててほしい」

「女川に来てくれることがありがたい。復興を見届けてほしい」

町の人は、身近な人へ亡くなった思いを知り、寂寥な仮設住宅の暮らしに耐え、命の紐帯に立たされた経験をしています。しかし、それに負けずに新しい町への

の夢を語り、震災の教訓を生かしてほしいと全力で伝えてくれました。

そうした女川の人々から、学生は多くのことを学びました。

「誰かが被災者になりたくないと気付いた」

「女川の人に負けぬように、自分たちもがんばりたい」

「女川へ行く前は被災地を特別視し、困っている人に奉仕することがボランティアだと思っていたけれど、そうではない。共にいることが大事だ」

そして自分たちが今できることを、それぞれに真剣に考え動き始めています。

「できることから始めてみる」というボランティアの基本姿勢も、女川の人たちから教えていただいた旅となりました。

多岐ななか、未学学生のために時間を割いてくださった、温かな女川のみまきさんから感謝します。

ボランティアコーディネーター 松本真理子
(写真提供は中央大学ボランティアステーション)

17

東日本大震災【被災地レポート】 2011.3.11

進む風化 進まぬ復興



学生記者 白藤隆之介（法学部4年）



メディアの被災地報道に思うこと

「進む風化、進まぬ復興」。今の東北を語るに欠かせないキーワードである。被災地取材の多くは、震災直後から数週間程度取材し、その後復興の様子を伝えるというスタイルが一般的だが、それが長期間続くと、被災地は「風景」としてしか捉えられなくなり、被災者の生活は「被災地」としてのみ認識される危険性がある。被災地の復興を促すためには、メディアの報道姿勢が大きく影響する。被災地の現状を伝えるだけでなく、復興の遅い理由や課題を掘り下げる必要がある。被災地の復興を促すには、メディアの報道姿勢が大きく影響する。被災地の現状を伝えるだけでなく、復興の遅い理由や課題を掘り下げる必要がある。

進む風化、高齢化、統廃合

被災地における「風化」「高齢化」の進行が懸念されているが、この問題は今は起こったことではない。宮城県では、もとより震災前から高齢化が進んでいおり、その中でも東北大震災が発生し、さらに多くの被災者が高齢化社会の中に入ってきた。震災による人口減と高齢化の進行が、被災地の将来に深刻な影響を及ぼしている。被災地における「風化」「高齢化」の進行が懸念されているが、この問題は今は起こったことではない。宮城県では、もとより震災前から高齢化が進んでいおり、その中でも東北大震災が発生し、さらに多くの被災者が高齢化社会の中に入ってきた。震災による人口減と高齢化の進行が、被災地の将来に深刻な影響を及ぼしている。

閉校式と母の留守電

2013年3月23日、気仙沼市立蒲島小学校が63年の歴史に幕を閉じた。この小学校は高台に位置しているため被災に免れたが、災害時の避難場所も少なかった。閉校式当日、多くの卒業生や保護者が参加し、閉校式は感動的に行われた。閉校式当日、多くの卒業生や保護者が参加し、閉校式は感動的に行われた。閉校式当日、多くの卒業生や保護者が参加し、閉校式は感動的に行われた。

閉校式当日、多くの卒業生や保護者が参加し、閉校式は感動的に行われた。閉校式当日、多くの卒業生や保護者が参加し、閉校式は感動的に行われた。

閉校式当日、多くの卒業生や保護者が参加し、閉校式は感動的に行われた。閉校式当日、多くの卒業生や保護者が参加し、閉校式は感動的に行われた。

閉校式当日、多くの卒業生や保護者が参加し、閉校式は感動的に行われた。閉校式当日、多くの卒業生や保護者が参加し、閉校式は感動的に行われた。

地域はどうなるだろう

震災による人口減と高齢化の進行が、被災地の将来に深刻な影響を及ぼしている。被災地における「風化」「高齢化」の進行が懸念されているが、この問題は今は起こったことではない。宮城県では、もとより震災前から高齢化が進んでいおり、その中でも東北大震災が発生し、さらに多くの被災者が高齢化社会の中に入ってきた。

2013年秋号

東日本大震災【被災地レポート】

「また来ます」の思いを届けに ~ボランティアの現場から~

青久里彩乃（法学部3年）



右に立寄ると、被災地を見守るボランティアの姿。左には、被災地の様子が見える。比較的大きな規模の復興作業が行われている。



復興作業の進捗状況。被災地の様子が見える。比較的大きな規模の復興作業が行われている。

8月の上旬、私はいつもお世話になっている気仙沼市の復興（おせい）地区にある復興作業所へ向かった。夏の気仙沼を語るには欠かせないキーワードである。被災地取材の多くは、震災直後から数週間程度取材し、その後復興の様子を伝えるというスタイルが一般的だが、それが長期間続くと、被災地は「風景」としてしか捉えられなくなり、被災者の生活は「被災地」としてのみ認識される危険性がある。

被災地における「風化」「高齢化」の進行が懸念されているが、この問題は今は起こったことではない。宮城県では、もとより震災前から高齢化が進んでいおり、その中でも東北大震災が発生し、さらに多くの被災者が高齢化社会の中に入ってきた。震災による人口減と高齢化の進行が、被災地の将来に深刻な影響を及ぼしている。

ハットと先声の言葉

私が初めてボランティアとして気仙沼を訪れたのは、2011年の12月。震災から約1年半が経過した。被災地は復興の道程が長く、復興の遅い理由や課題を掘り下げる必要がある。

被災地における「風化」「高齢化」の進行が懸念されているが、この問題は今は起こったことではない。宮城県では、もとより震災前から高齢化が進んでいおり、その中でも東北大震災が発生し、さらに多くの被災者が高齢化社会の中に入ってきた。震災による人口減と高齢化の進行が、被災地の将来に深刻な影響を及ぼしている。

被災地における「風化」「高齢化」の進行が懸念されているが、この問題は今は起こったことではない。宮城県では、もとより震災前から高齢化が進んでいおり、その中でも東北大震災が発生し、さらに多くの被災者が高齢化社会の中に入ってきた。震災による人口減と高齢化の進行が、被災地の将来に深刻な影響を及ぼしている。

20

【特集】ボランティアなう



「気仙沼でも、全国の震災ボランティアが活躍しています。」

今の被災地中学生は「語り世代」?

「今の気仙沼の中学生は「語り世代」だ、年の離れた中学生の姿と話をしても、私の同級生の母親の言葉が、今の気仙沼の中学生たちの中には、「語りあえず入れそうな高校に入って、卒業ができればそれでいい」という子が多い。ここで「語り」というのは、自分の経験を「語る」ことをいう。

然るに、震災を語りつづけて、昨日までそこにあった風景が、いとも簡単に消えてしまっただけで済んでしまった。被災者の生活が、震災前から変わらなくなっている。被災者の生活が、震災前から変わらなくなっている。被災者の生活が、震災前から変わらなくなっている。

HAKUMON Chuo

学内配布場所一覧

中大生が作る中大生のための情報誌「HAKUMON Chuo」は、各キャンパスの以下の場所で配布しています。

- 多摩キャンパス
 - 各学部・大学図書室
 - 学生部
 - 図書室
 - グリーンテラス
 - キッズセンター
 - 学生会
 - 国際センター
 - 生協2階
 - 入学センター
 - 英会
- 後援系キャンパス
 - 理工学部図書室
 - 生協
 - ビジネススクール図書室
- 市ヶ谷キャンパス
 - ローズホール図書室
- 市ヶ谷田町キャンパス
 - 総合インフォメーションカウンター
 - アカデミックセンター図書室
- 駿河台記念館
 - 駿河台記念館図書室

2011.3.11

2600人のはまらいんや踊り

5日間の活動が終わった。「気仙沼みなとまつり」の会場へ向かった。私たちが到着したころ、市内の51団体が、総勢約2600人による「はまらいんや踊り」が行われた。それぞれ個性豊かな衣装を纏って、夕方からおよそ3時間の間、声をかきながら踊り続ける。「はまらいんや」が気仙沼の方言で「一緒にしませんか?」を指すように、後から参加する人々と笑顔で、互いの手を取り合い、賑やかに踊り続けた。踊り手が、震災から約1年半が経過して、気仙沼の人々の持つ元気と絆を存分に感じることができた。



5日間の活動が終わった「気仙沼みなとまつり」の様子



震災から約1年半が経過して、気仙沼の人々の持つ元気と絆を存分に感じることができた。



震災から約1年半が経過して、気仙沼の人々の持つ元気と絆を存分に感じることができた。

学生記者になりませんか?

「HAKUMON Chuo」は中大生が取材・編集する大学広報誌です。現在、学部を学生を対象に学生記者を募集しています。

- 元新聞記者のプロや先輩の学生記者に、取材方法・原稿の書き方はじめ、添削指導を基礎から受けられます。
- 取材を通して、さまざまな人にも交流力が増えます。出会いの数は思いの外多くあります。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。



世界トップレベルのレベルを維持・向上させるために、学生記者として活躍しています。

お申し込み・お問い合わせ 中央大学広報室「HAKUMON Chuo」 編集担当：久保田茂昭
 Phone：042-674-2048(直通)
 E-mail: skubota@tamais.chuo-u.ac.jp

21

2013年冬号

東日本大震災【被災地レポート】

胸うたれた不屈の精神 「まげねっちや」 ～ボランティアの現場から～

藤澤花帆（法学部1年）



表紙の人
Kaho
Fujisawa



撮影する女川中の佐藤先生（撮影者＝松本真理子氏・中大ボランティアステーション）

「これ、ほとんど俺が撮った写真だよ」

宮城県女川町で震災をもとに発行された写真集「まげねっちや」（2012年・青志社）を手に入れそうに話するのは、女川中学校で国語を指導している佐藤敏郎教諭だ。

佐藤先生は震災以降、学校の防災担当教諭として学校防災に関する様々な活動に従事している。この活動が大変なのだ。

中央大学ボランティアステーション主催による「学校支援ボランティア@女川」に参加して、8月中旬、ほかのメンバーとともに女川に入った。被災地で初めて、震災当時の状況や体験したことを伺う機会があった。スピーカーは佐藤先生だった。

「はじめは食料の配給が不足し

て、肥満気味だった同僚の先生のウエストが一回りも細くなって、驚いたよ」

当時の苦労を冗談交じりに話す。しかし、時折見せるどここせそうそうな表情に、私は何となく違和感を覚えた。

「あのころは大変だったなよ」そうつぶやく佐藤先生の顔に普段の陽気な笑顔はなかった。

記事で知った衝撃事実

5日間の活動を終えて、大学に戻ったあと、女川についての記事を読まれた。記事で、佐藤先生が震災で小学生の愛車を亡くされた事実を知った。私は言葉を失った。

あときの何とも言いえない複雑な

2011.3.11

災害はさりげない日常を襲う 大災害はさりげない日常を奪う

女川中 佐藤敏郎教諭

表情の意味を察した。

そして、「災害はさりげない日常を襲う。大災害はさりげない日常を奪う」という佐藤先生の言葉は、自身の経験をもって聴いた言葉だったのだと理解した。

震災から2年半以上が経過した今もなお、当時のつらく悲しい経験を憶えて生きている人がたくさんいる。震災後何年経とうと、佐藤先生のように、つらいことを乗り越えようとする気持ちと向き合い、震災前よりも素晴らしい町になるよう奮闘する人たちの存在を忘れてはならない。

良きサポーターとして

今回のボランティアを通して感じたことがある。被災者とそれ以外の人たちの間に、心の壁を作ってはいけない。

私は岩手県盛岡市の出身だが、盛岡は被災地といっても内陸に位置しているため、津波による甚大な被害を経験した訳ではない。

今回初めて、直接的な津波の被害を受けた地域を訪れることに、言いようのない不安な思いがあった。しかし、女川を愛する多くの人々が、それぞれの立場から復興に熱意を持って取り組む姿に、地元を思う気持ちは全国どこでも変わらない、同じ東北人として、私なりにできることが

あるはずだと思うようになった。

避難所としての学校

大災害が起こった際、多くの住民は学校をはじめとする指定された避難所や物資の確保など避難所の運営は当然、教師などの現場の職員によって始められる。

しかし、生徒の安否確認や学校再開に向けた業務を行わなければならぬ。教師たちにとって、避難所の運営は肉体的にも大きな負担となる。

前述した佐藤教諭のように、自らの家族の安否が分からないまま、数日間学校に残り続けることは精神的にも相当な苦勞を強いられることになるだろう。

今回の震災でも、避難所としての学校の在り方が問題として挙げられ

た。注目されたのが、平成20年度から文科省が主体となって実施してきた「学校支援地域本部」である。

これは、地域住民がボランティアとして様々な学校支援活動を行うことを事業としており、宮城県の「みやぎの協働教育」な

どが実例に挙げられる。

文科省の調査によると、宮城県内の中学校40校に避難所での自治組織の立ち上がりについて質問したところ、学校支援地域本部を設置する20校の95%が順調だと答えた。一方で、未設置の20校で順調だったと答えたのは、35%に留まった。

災害時の避難所運営は、現場の職員の力だけでは決して十分とは言えない。緊急時に迅速な対応をとれるよう、日ごろから学校が地域住民にとって身近に開かれた存在であることが、今後の防災にとって重要であると考えられる。ボランティア活動で勉強することはたくさんある。

私はボランティア活動にこれからも継続して携わりたいと思っている。現地の人たちの良き理解者、良きサポーターとして気持ちを分かち合っていきたい。それが本当のボランティア精神につながるのではないかと信じている。



（写真：女川町に開設された避難所の様子（撮影者＝藤澤花帆）

草のみどり

草のみどり 258号 (2012年8月)

被災地支援学生

草のみどり

絆のふるさと一大震災に遭遇して

総合政策学部政策科学科2年 安原 元樹 (宮城県立宮城広瀬高校)



絶望
まだ一年も二年も経たず、被災地はもう一年たつたんだね、というものが多かったです。被災地はもう一年たつたんだね、というものが多かったです。被災地はもう一年たつたんだね、というものが多かったです。



大震災以前は、この場所に野営やキャンプが盛んで、賑わっていた。震災後、この場所は静かになった。

に業務は再開出来ず、終了を告げられた。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。

間や縦りにはほとんどありません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。



被災地でのボランティア活動の様子。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。

分だ同じ境遇の人はいくらもいる。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。

信じられない気持ちでした。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。

に申出て、いつかまた被災地へ。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。

歩み始めの春
震災直後、被災地へ。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。



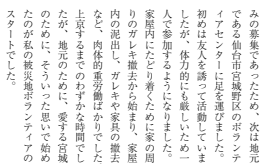
被災地でのボランティア活動の様子。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。

津波や道路の冠水で何度も来た道を引返し、遠回りをして被災地へ。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。

でした。今更にかいだいでもないようなヘドのにおい、ガレキに埋め尽くされた歩むべき道路も、クルマはあんなに少ない。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。

更には、どこか遠くがくじられた。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。

間や縦りにはほとんどありません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。



被災地でのボランティア活動の様子。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。

かきボランティアで募集している。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。

既に書かせていただいた通り、被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。

ステップの帰郷でした。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。

ボランティア活動も募集していました。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。被災地の状況は、震災前と比べて、ほとんど変わっていません。

草のみどり 259号 (2012年9月)

被災地支援学生
カンパレ!

復興に向けての自分の役割

法学部法律学科2年 西 宏明
(私立滝高校)



「復興」を志す学生たちによる復興支援部の話し合いの様子

被災者の言葉でシヨク

二〇一二年三月十一日午後四時四十分、東日本大震災が発生しました。今回の大震災は皆々周知の通り、被災地は甚大な被害を受けました。

の通り、東日本全体に大きな被害をもたらしました。被災地では、知親の安否が確認できず、被災者の悲しみは、被災地の隅々まで届いていないように感じました。

被災者の言葉を聞き、復興支援活動を通して、被災地に少しでも届くようにしたい。復興支援活動を通して、被災地に少しでも届くようにしたい。

きが散らばっていた場所が驚くほどスピードで回復していき... 復興に向けての自分の役割

復興支援活動の再開へ... 被災一周年を迎える頃、関東圏の被災地に対する意識は日に見えて変わっていった。



六月に中央大生協で準備した物資の様子



六月十日「復興」部会議の様子

ボランティア団体設立

ボランティア団体設立... 復興支援活動を通して、被災地に少しでも届くようにしたい。

復興支援活動を通して、被災地に少しでも届くようにしたい。

復興支援活動を通して、被災地に少しでも届くようにしたい。

復興支援活動を通して、被災地に少しでも届くようにしたい。

ボランティア団体設立

ボランティア団体設立... 復興支援活動を通して、被災地に少しでも届くようにしたい。

草のみどり 260号 (2012年11月)

被災地支援学生
カンパレ!!

被災者として、ボランティアとして

法学部国際企業関係法学科4年
長谷川 里実
(宮城県立石巻高校)



津波にのまれた心とこと
私のふるさがいまかたつてない
いほどの不意に見舞われたと知っ
たのは、発災後四時が経過後で
からでした。その当時は法学部の
「やる気応援委員会」を立ち、
英国ロンドンへ滞在していたから
です。前日までテレビのニュースは
取りもたず見られなかった可成り
壊された家を取り上げようという
声があつた。家族が全員事である
ことが分かったのはそれから三日
後でした。今までは経験したこと
のない大きな恐怖を感じると共に、
私より深刻な被害を受けた人た
ちを思いやることを、その事実を伝
えるのがはげしくなりました。
そして、そのような幸運で済んだ
ことを申し訳ないと思つた。奇妙な
感覚で全てを感じてきた。

た。でも、その一週間の生活の中
には海が荒れ、夜も暗い照明
運動停止しているエスカレーター
、人々の涙に涙が自粛ムードは
際立って臨時的に東京市に戻った
初めて被災地へ戻りました。
それは、それから一月ほどたった、
ゴールデンウィークの頃です。
夜は、船台に着いて、そこから
から海まで一時間半は車
から降りながら支た、暗闇の中
からヘッドライトに照らされ突
如目の前が止まらな船や、廃
車の山、ひたひたの残りの人の活
動の跡が残るらなうの家の前を
通り過ぎるなど、まじりかたつて
しませんでした。落ち着きを取り
戻れないと思つても、現実を伝え
る。意識することが出来ない。死が
すぐそこにあるかも知れない。死
うが、またも一八年前に被災地
するまでの一八年前に被災地
なので、どこか知らない所まで
しまったような感覚で、石巻市
東松島市に母のいる石巻市内
を見て回り、どこまで行っ
ても変わり果てた光景が続いては

昨日、津波の犠牲者と共に
ボランテアのおまけ
そんな私が、東北一帯のボラン
ティアをして聞かされたのは、発
災後半年たった六月にPLI(国
際労働のゼミ生と教授と共に宮城
県田代町へのボランティアツアー
に参加した時でした。行きは深夜
バスの中で「私たちがボランティア



被災地でのボランティア活動の様子

ア活動をしていいのだ」という
当たり前のごまかされた時は、
本当にハッとする瞬間でした。入
学時から比較的行動派で、何か
に付けて色々アクションを起す
性格である私が、今回はその目
で何もしていないことに気付いた
のです。今考えると、もっと活
動の私「普通の生活に戻る」と
とで精いっぱい、他のこと目
を向ける余裕がなかったのだと思
います。津波で私を生かしてくれた
家と心とが破壊されてしま

た光景を見て、すっかりそのショ
ックにのまれてしまつていたので
す。それからの私は、とにかく自分
に出来ることを探そうと集中し
ました。夏休み中は、ボランティア
に興味のある学生と、学生を統
理するボランティアのNGO、NPO
のマッチングを行う学生団体で、
学生の送り出しの事前研修を年
のフレクシオンを担う。意外
にもボランティアに興味はあ
るが、知識も切れない学生が多い
ことを知り、そのころ、秋の
学園祭期間中にはボランティアア
ミーを企画し、学年・学部別の異
なる学生七人と共に宮城県東松島
島へ活動をしに行きました。更に
冬には、写真展を校内で開催しま
した。

「ボランティア」に対する考え
方の変化
しかし、実際に活動してみてもボ
ランティアに対する考え方が変わ
り、今となってはリーダーにな
うに、何度も現場に赴くようにな
りました。このことについて、以
下お話ししたいと思います。
①ボランティアは役に立たない
ボランティアは、ほとんどの人
が「目から見て一週間の活動
間、しかも活動内容に関する専
門知識を持たず活動する。以
前は、受け入れ側の準備も考え
ると、このような「素人ボランテ
ア」は現場の復興にこれはと負

献出来るか疑問でした。また、
学生団体で研修担当をしていた時
に、現場でのボランティアを終え
た学生からの「現場に行つたもの
の、天候があまり活動出来な
かったのか、行った意味があつた
かどうか分からない」という声
を聞いたことでした。しかし私は、
意義のある行動と思つています。
私も、震災前は東北の外の人では
ないような、小さな町の出身か
ら分かるのですが、ただ今はは
遠くから来てきてくれる人た
ちがいるというそれだけのことが
復興へと頑張るエネルギーを
出すことがあります。地元の人
たちと話していても、津波で生活が
全部やられてしまい、あきらめ
うかと思つたけれど、たまたまボ
ランティアさんが来てくれて、助
まされた」という言葉を何度
も聞きました。ですから、ただ現
場に赴くだけでもそれは大きな意
義を持つてくれるのです。
②ボランティアは自己満足?
活動を始めて、「ボランティア
はしよせん自己満足だ」という声



被災地の子どもたちと交流するボランティアの様子

を聞いたことがあります。恐ろしく
を聞いたことがあります。恐ろしく
分になたの活動であるという
ことを言いたくないなと思つた
です。確かに、中には来るだけ来
て現地に寝るだけという人も
もいるので、既述は言えませんが
すべてのボランティアがただの自
己満足であるとは決して思
いません。地元の人が話すと分る
のですが、彼らは自分たちが
どのよな活動をしているのか、
一年以上がたつたあとも、
ます。また、友人ボランティア
に行つた人は、現地に居ても
ておれの手を貸さ取つていま
した。こちら側も活動を持って活動
すれば、きちんと現地の人々の手
助けになる、気持ちよく伝わるの
です。このよなボランティアの
形は、決して自己満足ではない
形は、決して自己満足ではない
③ボランティアは迷惑する?
「復讐支援」と「ボランティア」
という言葉を、どこかごちゃ
ごちゃに混ぜて「ボランティア
というイメージを歪めたい」と
り、そのようなイメージを持つて

これらの言葉を使う人も多くは思
いません。しかし私は、ボランテ
ア活動を始めて、進んだみんな
ことを言えたらと感じていま
す。明確な目的意識を持って活
動を起せばいいという決意を
信じて進んでいくという決意を
てくれたのは現地で東京でボラ
ティア活動をする中で、自分
ことが出来たし、各方面で活躍
する学生が来ると出来た。その
間とのつながりも出来た。そ
して何より、そのような仲間や
現地の人の、人生に向き合い、葛
藤しながら自分自身を歩んで行
く人たちの姿を見て勇気付けられ
ました。実は、震災が起つた当時
私は全三年生で、就職活動の時
に、自分自身も活動を持てない
ふんばりが「被災地」と呼ばれ
なくなく日々。

迷っていました。本当は学をし
たいという気持ちも強かつたの
ですが、それを無理やり曲げて職
活動して、たまたまあつた。
しかし、最終的には、自分の
信じて進んでいくという決意を
てくれたのは現地で東京でボラ
ティア活動をする中で、自分
ことが出来たし、各方面で活躍
する学生が来ると出来た。その
間とのつながりも出来た。そ
して何より、そのような仲間や
現地の人の、人生に向き合い、葛
藤しながら自分自身を歩んで行
く人たちの姿を見て勇気付けられ
ました。実は、震災が起つた当時
私は全三年生で、就職活動の時
に、自分自身も活動を持てない
ふんばりが「被災地」と呼ばれ
なくなく日々。

かつがれが欲しい、たまたま
まるな被災地をよこし、は
りともな被災地となり、道徳
ほどと修復された被災地テレビ
などで見ると、被災地は全立
ちます。しかし、実際はむしろ、ボ
ランティアが減つていっている
自分たちの力で進んでいかな
はいけない状況です。私に
つてきた」と思ふと、たまたま
多くの人に、被災地に関心を持
掛けて、行動を起して下さる
ことを願っています。



被災地でのボランティア活動の様子



被災地でのボランティア活動の様子

草のみどり 261号 (2012年12月)

被災地支援学生
四ノ丸

わたしのふるさと、ふくしま

総合政策学部国際政策文化学科2年
坂内 あゆみ (福島県立郡山高校)



地元で過ごした一八年間。高校を卒業後に入学した東京の専門学校、私はわずか半年で中退し、再び故郷の福島県に戻ってきた。そして二年間の無業生活を経て、無事に中央大学から合格通知をいただくことが出来た。入学手続きも済ませ、いよいよ再び東京へ」と意気揚々としていたあの日。二〇一二年二月一日、四時四十分、一五時、友人と連絡約束をしていた私はいつものように福島県郡山市にある実家に居、

顔をみると、なおさら涙が出そうになった。これからどうやって生きていくか、そんな思いに浸りながらも、そんな思いに浸りながらも、母の涙。

顔をみると、なおさら涙が出そうになった。これからどうやって生きていくか、そんな思いに浸りながらも、そんな思いに浸りながらも、母の涙。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。



二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

二〇一二年三月、震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。震災がこたえたる異変があらわになった。

13. 制作物掲載

1. パンフレット

ボランティアセンターリーフレット

ボランティアセンターリーフレット (中)

2. ポスター

女川スタディツアー

女川町の今を知ろう

5月24日(金)~26日(日)
25名

【主催】女川町 復興推進課
【協賛】中央大学ボランティアステーション企画

【日時】5月24日(金)10:00~12:00(集合) 25名
5月25日(土)10:00~12:00(集合) 25名
5月26日(日)10:00~12:00(集合) 25名

【参加費】無料

【申込】5月15日(木)まで

【申込先】中央大学ボランティアステーション企画

【申込先】042-231-1111

【申込先】volunteer@ccu.ac.jp

【申込先】〒213-8501 中央大学ボランティアステーション企画

2013夏ボランティア

夏ボラの季節！東北へ行こう
2013夏のボランティア説明会

＜多摩キャンパス＞
7月10日(水)11:40~15:00(昼休みあり) 7101教室
7月10日(水)16:40~18:30(開) 7101教室
7月19日(金)12:40~15:00(昼休みあり) 9101教室

＜後楽園キャンパス＞
7月18日(木)12:30~14:30(昼休みあり) 3号館1階会議室301

紹介予定のプログラム

① 被災地支援活動
② 被災地支援活動
③ 被災地支援活動
④ 被災地支援活動
⑤ 被災地支援活動
⑥ 被災地支援活動
⑦ 被災地支援活動
⑧ 被災地支援活動

【主催】中央大学ボランティアステーション企画

【協賛】中央大学ボランティアステーション企画

【日時】7月10日(水)11:40~15:00(昼休みあり) 7101教室
7月10日(水)16:40~18:30(開) 7101教室
7月19日(金)12:40~15:00(昼休みあり) 9101教室
7月18日(木)12:30~14:30(昼休みあり) 3号館1階会議室301

【参加費】無料

【申込】5月15日(木)まで

【申込先】中央大学ボランティアステーション企画

【申込先】042-231-1111

【申込先】volunteer@ccu.ac.jp

【申込先】〒213-8501 中央大学ボランティアステーション企画

クリーン作戦2013春

中央大学ボランティアステーション企画

中央大学 クリーン作戦 2013春

～今日から始められる。地域貢献活動～

日時 2013年4月18日(土) 9:00~12:00(予定)
(雨天・天候等により18日(土)11日(日)開催)

場所 多摩キャンパス 東区(新中野地区など)

対象 中央大学学生・教職員

申込 申し込みにて、学校番号・氏名・連絡先を
http://volunteer@ccu.ac.jp/ に記入し、お申し込みください。

備考 服装は作業に支障がない、動きやすい服装にしてください。
サークル・ゼミなど、グループでの参加も歓迎します。
(参加に費用はかかりません。)

お問い合わせ先 中央大学ボランティアステーション企画
042-231-1111

http://volunteer@ccu.ac.jp/

クリーン作戦2013秋

中央大学ボランティアステーション企画

中央大学 クリーン作戦 2013秋

～今日から始められる。地域貢献活動～

日時 2013年11月23日(土) 10:00~12:00(予定)
(雨天・天候等により11月30日(土)に繰り替え)
ボランティアステーション前(6月臨時下1期) 9・50教室

場所 多摩キャンパス 東区(新中野地区など)

対象 中央大学学生・教職員

申込 メールにて、学部・学年・氏名・連絡先を
http://volunteer@ccu.ac.jp/ に記入し、お申し込みください。

持ち物 手袋 (ビニール・作業・ゴミ袋) 各自持ち

備考 服装は作業に支障がない、動きやすい服装にしてください。
サークル・ゼミなど、グループでの参加も歓迎です。
(事前にご確認ください。)

当日参加も歓迎です。
多くの方のご参加をスタッフ一同心よりお待ちしております。

お問い合わせ先 中央大学ボランティアステーション企画
042-231-1111

ボランティアマナー講座

この夏、ワタシ
ボランティアデビュー
しまーす♪

さよーと待って!
"ゆるぎだけ"じゃ足りない!

ボランティアマナー講座

7月13日(土)
13時30分~15時

会場：多摩キャンパス 6408教室 (6号館4階)
定員：本学学部生 30人
内容：ボランティアへ行く前に知っておきたい最低限のマナー
参加費：無料

申込〆せ
7月12日

防災特別講座

今、ここで災害が起きたら・・・
あなたは生き残れますか?
大切な仲間や家族を守れますか?
基本の東技から緊急時のチームビルディングまで、災害時の対応力を総合的に身につける講座です。

防災を学ぶへ

防災特別講座

10/19(土)	会場	13時~15時 多摩キャンパス 6408教室 (6号館4階)
11/23(土)	会場	13時~15時 多摩キャンパス 6408教室 (6号館4階)
11/30(土)	会場	13時~15時 多摩キャンパス 6408教室 (6号館4階)
12/7(土)	会場	13時~15時 多摩キャンパス 6408教室 (6号館4階)
1/11(土)	会場	13時~15時 多摩キャンパス 6408教室 (6号館4階)

震災ボランティアシンポジウム

中央大学 ボランティア

学生に知ってほしい、のボランティア

4月23日(火) 中ホール 17:00~19:00

講師：村井雅彦氏 (被災地NPO協賛センター代表)

パネリスト：村井雅彦氏
松本真璃子 (本学ボランティアコーディネーター)
西室明 (法學部3年/学生団体「和みの輪」)

ボランティア活動写真展

ボランティア活動写真展

10/22~29 14:00~17:00

中央図書館1階 異色スペース

2013年度 中央大学ボランティアステーション報告書

発行	2014年3月31日
発行者	中央大学ボランティアステーション 〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1 Tel : 042-674-3487 Fax : 042-674-3469 E-mail:chuo_volunteer@tamajs.chuo-u.ac.jp http://www.chuo-u.ac.jp/usr/volunteer/
印刷	奥村印刷株式会社

